

小学校教育におけるキャリア教育の展開

～自己分析と他者評価の関連性について～

Expansion of Career Education in the Elementary School

Relevance between Self Assessment and Others Evaluation

辻井 満雄

TSUJII Mitsuo

村田 夏樹

MURATA Natsuki

石垣 孝太

ISHIGAKI Kouta

氷見 卓也

HIMI Takuya

宮腰 真央

MIYAKOSHI Masao

小学校におけるキャリア教育の実践を通して、児童一人一人が自身のよさを認識し、未来へ希望を抱くことができる小学校におけるキャリア教育の展開の在り様について研究した。児童に、「自分の将来就きたい職業を考えましょう」と投げかけても、多くは将来像を簡単には描けないことが分かった。そこで、自分の長所や短所、好きなことを考えることを契機に、それらを発揮できる職業を調べ、その職業に就くために必要なスキルや、それを身に付けるために生活で何を実践していくか考えるといったスモールステップで学習を進めた。そして、自分の長所や特質を自分自身で見つけ出すことは、自己対話する力が必要であり、6年生という段階でも難しいことが分かったので、そこで、学級の仲間、保護者、先輩等からの「評価」や「アドバイス」、教師の「芽線」を注入することで、自己対話の助けとした。さらに、付箋を使った学級の仲間からの承認や教師による児童に適していると考えられる職業の紹介も行った。これらのことにより、児童は自己有用感や自己肯定感を高めることができた。特に、教師からの「芽線」や保護者や先輩からのアドバイス等は、児童の職業の幅を広げることにより、とても有効だった。

キーワード：小学校キャリア教育 自己分析 他者からの評価 マンダラート 芽線

1 はじめに

現代を生きる児童たちが将来就業する際には、現存する職業の大半が人の手を離れ、AI（人工知能）やロボットに任せられると言われている。オックスフォード大学の研究チーム（2013）に

よれば、それは今後10年～20年のうちに加速化し、予想として現存する職業全体の47%が自動化するとしている。児童たちが夢描いた職業が、将来自身が就業する際にはもう存在しないということにもなりかねないわけである。

しかし、そのような未来が不透明な現代においても、児童たちには自己の長所を十分に生かし、職業を選択・発見・開発し、やりがいをもって働くことができる大人になってほしいと切に願う。そして、そのような大人を生み出していく土壌は、家庭での教育であり、学校教育である。特に、児童一人一人に自分自身のよさを最大限に生かしていこうとする気持ちや、未来への希望を育てることが、学校教育全般を通しての責務であり、中でもキャリア教育が果たすべき役割は大きいと考える。しかし、小学校におけるキャリア教育については、学年における取組は見られるが、学校全体として6年間を見通した計画は不十分に感じられる。

そこで本研究では、児童一人一人が自身のよさを認識し、未来へ希望を抱くことができるよう小学校段階におけるキャリア教育の展開の在り様について研究していく。児童が自身のよさを認識するためには、自分自身を見つめる、振り返る機会を設ける必要があると考える。言い換えれば、「自分を知る＝自己分析」が前提となる。しかし、小学校段階の児童が、個人で自身のよさをみつめることは、表現力の稚拙さや思春期特有の気恥ずかしさ等が影響し、困難であることが予想される。

そこで、学級担任制である小学校の集団教育の利を生かし、学級の仲間との関わりや学級の仲間からの評価等に関連させていくこととした。さらには、他者としての幅を広げ、保護者、先輩、教師からの評価の影響も含むこととした。

以上を踏まえ、本研究では、児童が自身のよさを認識する「自己分析」と、それを支える「他者からの評価」の関連に焦点を絞り、研究を進めていく。

2 研究方法

- (1) 5名で、小学校におけるキャリア教育について定期的に協議を行う。
- (2) 協議を参考に、各自の勤務校(小学校4校：6年担任3名、4年担任1名)で「総合的な学習の時間」等において実践を行う。
- (3) 実践をもちより、分析を行い、まとめる。

3 キャリア教育を通して育てたい力

(1) キャリア教育が目指すもの

文部科学省は、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(2011)において「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通じて、キャリア発達を促す教育がキャリア教育である」と定義している。「キャリア発達」とは、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」である。そして、「分野や職種にかかわらず、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力」として、キャリア教育で育成する「基礎的・汎用的能力」を定

義した。この「基礎的・汎用的能力」は、「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の4つの能力によって構成される。これらの能力を、各教科、道徳の時間、総合的な学習の時間、特別活動等、学校の教育活動全体を通じて児童生徒に培っていくことが求められている。これらの能力はあまりに幅が広く、捉え方次第では日々の教育活動を行っていくことが、キャリア教育と全て結び付くとも考えられる。そのため、ともすると漠然となる可能性がある。また加えて、AI等の進歩に伴って予想される未来の職業の在り方の変化等も視野に入れたとき、より早い発達段階からの具体的なキャリア教育の計画立案、実践、改善、そしてそれらを研究として蓄積していくことが急務であると考えられる。

文部科学省は、「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告 児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために」(2004)において、「小学校・中学校・高等学校におけるキャリア発達」を整理している。小学校段階は「進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期」と位置付けられ、その課題として「自己及び他者への積極的関心の形成・発展」、「身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上」、「夢や希望、憧れる自己イメージの獲得」、「勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の育成」を挙げている。

本研究では、小学校段階において、「自己分析」と「他者からの評価」の場を意図的に設定することで、上記の特に「身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上」や「夢や希望、憧れる自己イメージ」の獲得において効果があるのではないかと考える。

(2) 平成29年度版学習指導要領に基づくキャリア教育実践の在り方

平成29年3月31日に告示された小学校学習指導要領の総則、第1章第4の1の(3)には、キャリア教育の充実として「児童が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要しつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。」と述べられている。このように、告示文の第1章総則に明示されたということは、特定の教科等ではなく教育課程全体に係るということである。一方で、今までのキャリア教育について、同総則の解説には、「学校教育においては、キャリア教育の理念が浸透してきている一方で、これまで学校の教育活動全体で行うとされてきた意図が十分に理解されず、指導場面が曖昧にされてしまい、また、狭義の「進路指導」との混同により、特に特別活動において進路に関連する内容が存在しない小学校においては、体系的に行われてこなかったという課題もある。また、将来の夢を描くことばかりに力点が置かれ、『働くこと』の現実や必要な資質・能力の育成につなげていく指導が軽視されていたりするのではないかと、といった指摘もある。」と述べられている。

ここで示されるように、今までのキャリア教育の捉えと、実践を問い直してみる必要があると考える。これからの社会を生き抜く児童には、小学校の早い段階で「働くことの意義」について考えることや、自分の特性や思いを生かすといった視点で将来の職業について考えることが求められる。そして、将来に向けて今自分がすべきことを考え、それに向かって努力していくことを通して、一人一人に応じたキャリア形成をし、自己実現を果たしていくこ

とが望まれる。

そこで本研究では、「働くことの意義」に焦点を当て、キャリア形成に関わる「自己分析」と「他者による評価」との関連について、具体的な実践を通して明らかにしようと試みた。

4 研究の概要

本研究は、4名の教諭がそれぞれの小学校（4校）で、総合的な学習の時間等を中心として、4年生と6年生の学年段階に応じたキャリア教育の在り方を実践し、考察を加えたものである。

各実践を行った小学校が異なるため、相違点（単元構成、児童の実態、児童の課題把握、地域性等）が多く見られる。しかし、類似点として「芽線（めせん）」による児童の見とりと「マングラート」の活用が挙げられる。児童の実態を「芽線」によって捉え、単元構成をし、目指す児童の姿を描き出し、実践・考察を行っている点については、各実践に共通している。また、将来を思い描いたり目標を設定したりする際には、「マングラート」を活用している点も、各実践に共通している。

（1）「芽線」とは

学校現場における教師の児童の捉えは、現状のみを評価することに終始し、かつ教師の理想に近い「よい子」でいることを求めてしまうことが多いのではないかと考える。「芽線」の捉え方とは、そういった児童の捉え方とは一線を画し、将来的な社会構成員としての姿までを想定する、本研究独自の児童の捉え方である。

児童の見とりについては、どの教師でも日常的に行っていることであり、特別ここで述べる必要はないと考える。本研究で用いる「芽線」は、日々の児童の見とりに「その児童の将来の可能性」を描くことを加えたものである。

例えば、学級の中に、みんなを引っ張っていくリーダータイプではないが、困っている人にそっと手を差し伸べるA児がいたとしよう。教師が日常的に行っている見とりでは、「困っている人にそっと手を差し伸べてあげられる優しい人」として、A児を捉える。しかし、「芽線」による見とりでは、「リーダータイプではない」、「困っている人に手を差し伸べる」、「優しい人」というA児に見られる特性から、さらに、介護職や看護職、CA等の現存する職業に就いている姿までを描くものである。

このような捉えは、教師の主観的なものであり、児童の将来無数にある選択肢を限定的な枠にはめ込んでしまっているようにも見える。さらに、児童にとって必要感のない捉え方であるかもしれない。しかし、「芽線」の捉えは他者評価の一つであり、児童の自己評価とどのような関連性が見られるか検証することに意義はあると言えよう。

また、このような考えに至る上で、これまでの研究を散見したところ、小学校段階のキャリア教育について、「その方法論の曖昧さ」（※①）が見受けられ、実践が確立されていないことが挙げられていることから、「芽線」の捉え方が小学校段階のキャリア教育に適か否かを実証していくことに何ら問題はない。さらに、「芽線」の捉え方は、子供の「職業観・勤労観」（※②）を育成していく上で、「児童と教師がつながる」（※③）ために必要な方法と成り得ると考える。

そこで本研究では、「芽線」を「今、目の前にいる児童の姿（その児童に見られる芽）から、将来の姿を描くことで、現在と将来を結ぶ線」と定義する。

- ※① 佐藤広志(2013)によると、現行のキャリア教育は、「職業観・就労観の育成や、社会人基礎力などの目標設定はなされていても、それを実際にどうやって、どういう方法で身につけるかを示していない、「この点は、まだ十分な検討が尽くされていない実践課題」である、「これから様々な方法論が試みられ、検証されていくことになるだろう」と述べられている。
- ※② 国立教育政策研究所生徒指導センター(2002)によると、「職業観」とは、「人それぞれの職業に対する価値的な理解であり、人が生きていく上での職業の果たす意義や役割についての認識」であり、「就労観」とは、「勤労に対する価値的な理解・認識」であり、「職業としての仕事や勤めだけでなく、ボランティア活動、家事や手伝い、その他の役割遂行などを含む、働くことそのものに対する個人の見方や考え方、価値観であり、個人が働くこととどのように向き合って生きていくかという姿勢や構えを規定する基準となるもの」と定義されている。

(<https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/sinro/1hobun.pdf> 2019.1.7 取得)

- ※③ 吉武聡一、西山久子(2011)は、小学校におけるキャリア教育では、「つなぐ」をキーワードとして「子どもたちと教師の間にしっかりとつながりができ、信頼関係ができて落ち着いた学級になることが、キャリア教育の推進の基盤となる」。その上で、「キャリアカウンセリングを適切に行っていかなければならない」とし、キャリアカウンセリングを「子どものキャリア発達を支援するための個別援助のことであるが小学校段階においては、児童のさまざまな体験活動における思いや気づきを受容的態度と共感的理解を基礎に、『観る・聴く・受け止める』というコミュニケーションを積極的に行っていくための方策である」と述べている。

(2) マンダラートについて

マンダラートとは、発想法の一種で、紙などに9つのマスを用意し、それを埋めていくという作業ルールを設けることにより、アイディアを整理・外化し、思考を深めていくことができるもので、今泉浩晃(1987)に考案されたものである。

本研究では、キャリア発達を促す効果的な事例として、大谷翔平選手が花巻東高校の時代に佐々木監督の指導によって書いたマンダラートに着目した。81マスのシートを用意し、中央に「達成すべき目標」を書き、その周辺8マスにKPI(重要業績評価指標/Key Performance Indicators)を入れる。そして、この8つのKPIを中心に置いて、さらにそれらを達成するための手段と方法を上げていくといったものである。つまり、KPI=ミニ・ゴールとし、「ミニ・ゴールを達成するためのKPIをさらに書き上げていく」といったものである。このマンダラートは、目標達成のプロセスを整理するために有効であると考えられる。大谷選手は、さらに、この細分化して設定した目標について、「期間を設定」し、「目標が達成できたかをノートに振り返る」ことを、日々継続して実践してきた。

本研究では、この大谷選手のマンダラートとその手法を参考にし、各実践者が、ねらいや児童の実態に応じて、その内容や取り組み方を改良して行うことを共通とした。

5 研究の内容

(1) 実践1 <見つけよう!『自分の可能性』>

A 小学校 第6学年 18名(男子11名、女子7名)を対象に総合的な学習の時間の「見つけよう!『自分の可能性』」を展開した。

4月、児童たちに「将来の夢はありますか?」というアンケートを行った。「ある」と回答し、具体的な職業名を挙げた児童が16%、「ない」「明確に決まっていない」と回答した児童が84%という結果だった。学習の意義を見出すことがないまま、毎日登校し、授業を受けている現状を見て、危機感を感じた。

そこで、総合的な学習の時間を活用し、自分の可能性を発見し、その可能性を十分に発揮できる職業を見付けるための、調べる学習を展開しようと考えた。

(ア) 他者評価である「芽線」

児童たちに「将来の夢を考えよう」と提案しても、知っている職業が少ないため、限りある職業しか出てこない。そこで、保護者や友達、担任の視点から児童に適していると考えられる職業を考え、伝える活動を行った。

① 保護者の視点

保護者アンケートという形で、「児童の長所や熱中すること」「こんな大人になってほしいと思っていること」を書いてもらった。保護者が捉える長所は、児童たちにとって新鮮な感覚となり、楽しみながら読んでいた。以下は、保護者の回答の一部である。

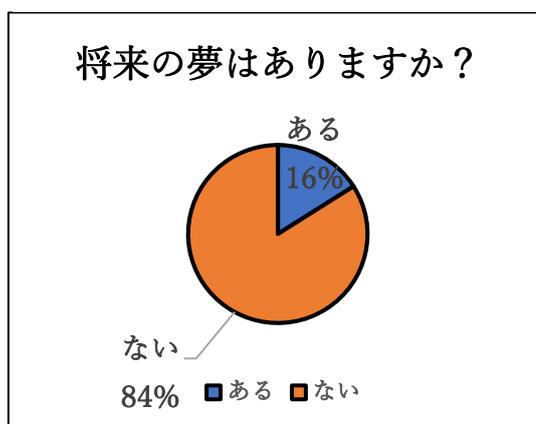
- ・人が好きなので、人と関わる仕事をしたらよいのではないか
- ・車が好きなので車関係の仕事がよいかも
- ・物を作ることが上手なので、設計士や建築士がよいのではないか
- ・習っている英語を生かして、外国の人と接する仕事をしてほしい

保護者の言葉を受け、児童たちは、以下のように感想を書いた。

- ・親が願う大人に近づきたいと思った
- ・研究者や科学者になれるのかなと親が思ってくれることがうれしかった
- ・自分には絶対合わないと思ったことを親は合うと思ってくれたことが驚いたけど、うれしかった

また、多くの保護者からの言葉に、

【資料1 4月当初の児童たちの実態】



- ・一人で大きくなったわけではなく、社会や周りに支えられながら寛容さの中で大人になるので、懐の広い人間になってほしい
- ・くじけたり、迷ったりするときには、身近な人の声を聞き入れて、たくさん悩み、考え抜いて自信を身に付け、どんなことにも積極的に立ち向かっていける対応力を養い、思いやりの心で人に接することができる大人になってほしい

と付記されていた。キャリア教育を通して、保護者の本音や願い、生き方を考える機会ともなった。

② 友達・担任の視点

教室全体では、友達関係に左右される可能性があるかと判断し、4～5人で構成されている生活班で付箋に長所や熱中すること、向いている職業を互いに書き合う活動をした。

児童たちの付箋を見ると、性格が明るいから漫才師、世話をすることが得意だから看護師等と書いてあり、友達に性格を認められる喜びを感じることはできていた。しかし、友達からの指摘された職業の幅はとても狭かった。

そこで、担任から「芽線」で捉えた児童たちの長所と、それに合う職業を学級全体で発表した。担任が気を付けたことは、児童たちが考えそうな職業を避け、思いつかないような職業を伝えることだった。すると児童たちは、「家の設計得意そうだな」や「舞台上で演じている〇〇さんの姿が思い浮かぶ」など、友達の長所や職業を認める雰囲気生まれた。また、担任の「芽線」を聞いた児童たちの感想には、

- ・先生は、ぼくのことをよく見ているからうれしかった
- ・自分では思い付くことができない職業が多くあって驚いた。その職業がとても気になった
- ・自分では気付かない可能性がまだまだあることに気付かせてもらった

など、自己有用感を高める言葉が多く書かれていた。

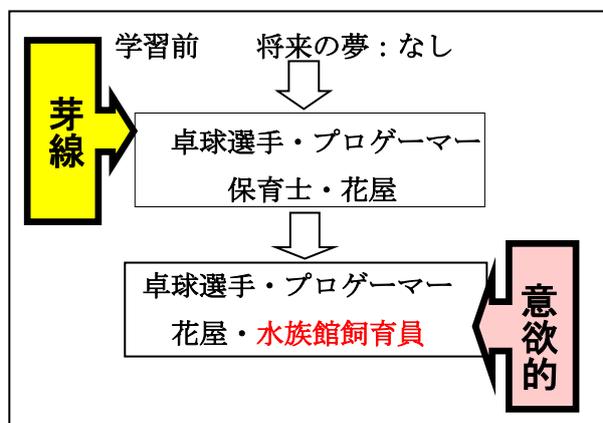
「芽線」を用いたことで、将来の職業について意欲的に考えるようになったI児の変容を取り上げる。

【I児の変容】

I児は4月の段階で、将来の夢はないと回答していた。保護者からは、集中力があり、研究者に向いているのではないかというアドバイスがあった。友達からは、「卓球を習っているから、卓球の選手がよい」や「絵が得意だから画家やゲームクリエイターがよい」といったアドバイスがあった。

担任の「芽線」では、「委員会や学級での水やり当番を欠かさず行う姿を知っているので、植物園で働く人や花屋、小さい子に

【資料2 I児の変容】



優しく接することができるので保育士が合っているかもしれない」と発表した。担任からの発表後、「I 児にはぴったりの職業ばかりだ」と友達に認められたことをきっかけに、職業について興味を持ち始めた。

I 児は職業調べのワークシートに卓球選手、プログラマー、保育士、花屋の 4 つを記入した。ワークシート記入後の I 児の感想には、「ぼくが思っていることと先生の思っていることが違うことに驚いたが、自分の考えと似ていることもあってよかった」と書かれていた。また、「動植物を大切にしている」と発表されてから、I 児は職業調べで水族館の飼育員をインターネットで見つけ出し、意欲的にメモをとっていた。他者からの視点や認めが、I 児の考えの背中を押し、将来の夢に自信をもつことができたと考える。

他者からの客観的な視点をを用いることで、児童たちは可能性の幅を広げることができるとともに、自分の存在や長所を認められることで、自己有用感を高めることもできる。次の「総合的な学習の時間」はいつか児童たちから質問されるほど、児童たちに可能性を広げる楽しさを感じさせることができた。

(イ) 自己分析のための「マンダラート」

可能性を発見し、それらを発揮できる職業を考えるために、オリジナルの「マンダラート」を製作し、実践した。自分を中心に置き、こんな大人になりたいという将来の思いを上、長所を下に記入し、それぞれにふさわしい職業を考え、書き込むようにした。

マンダラートを記入したことで、自分の長所と職業を結び付けることができるのではないかと考えた F 児の変容を取り上げる。

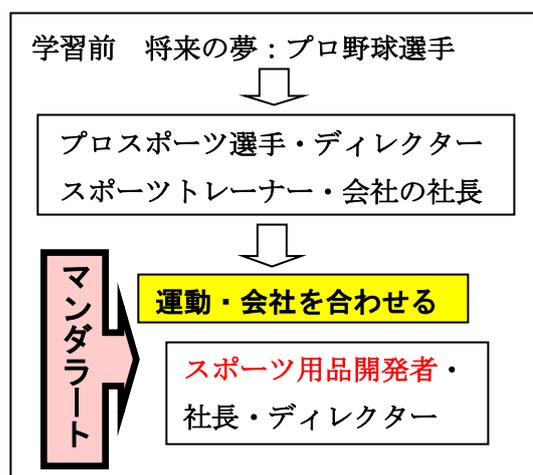
【F 児の変容】

F 児は 4 月の段階で、将来の夢をプロ野球選手としていた。保護者からは希望の職業の記入がなく、友達は F 児が野球を習っているため、プロ野球選手になるものだと思い込んでいた。しかし、担任の「芽線」により、運動が得意だからプロスポーツ選手かアイディアが豊富だからテレビ局のディレクターだと発表した。すると、プロ野球選手しか考えていなかった F 児は、職業は野球選手だけではないということに気づき、インターネットや本を使って多くの職業を調べた。

F 児は「思い」の欄に、人を支えてあげられる大人と記入し、それに合う職業としてスポーツ用品開発会社の人と考えた。また、常に先頭に立てる強い気持ちをもった大人と記入し、会社の社長と考えた。「長所」の欄には、スポーツが得意と書き、スポーツトレーナー、頭の回転が速いと書き、テレビ会社の社員と書いた。

マンダラートを書くことで F 児は、プロ野球選手にならなければいけないという固定観念を捨てることができ、将来の職業にプロ野球選手と書かなくなった。また、自分のマンダラ

【資料 3 F 児の変容】



ートを見つめ、運動と会社を結び付けるものはないかと考え始め、スポーツ用品を扱う会社に勤務することで自分の長所や思いを全て生かすことができるのではないかと考えるようになった。将来に対する考えや思いを図式化することで考えを整理分析することができた。

(ウ) 働くことを身近なものとして捉えるための中学生のポスターセッション

小学校と中学校が連携を図り、キャリア教育を行う一環として、「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」を体験した中学2年生が、職場体験を通して学んだことやこれからの生活で高めていくべき資質についてポスターセッションを行い、小学生は3つの職種の発表を聞き取り、自分の生き方や将来について考えを深める学習を行った。

ポスターセッションを聞き、これからの生活で高めていかなければいけない資質をマンダラートを活用して明確に捉えることができたT児の変容を取り上げる。

【T児の変容】

T児は4月のアンケートで将来の夢を保育士と考えていた。保護者が保育士だったこともあり、母の背中を追うことが目標となっていた。しかし、保護者や友達、担任の「芽線」を受け、長所を生かす仕事として特別支援学校教諭、ホテルウーマン、書道家、保育士・児童心理士をマンダラートに記入した。

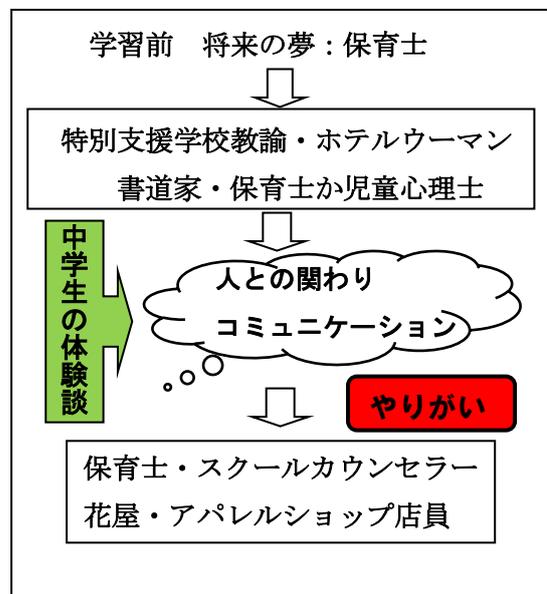
T児は4つの職業が異なるものと捉えていたが、アルミ工場、スーパーマーケット、保育士を体験した中学生のポスターセッションを聞いたT児の感想には、「3つの職業を比べて、どの仕事も人との関わりを大事にし、笑顔でいることなどコミュニケーションを大事にしていることが分かった」と書かれていた。

T児は自分のマンダラートを再び読み、4つの職業にコミュニケーションが必要だと気づき、これからの生活でコミュニケーション能力を高めるために、「笑顔であいさつ、自分から」「学年関係なく遊んだり、会話をしたりする」「家族団らんを心がける」「あったか言葉を使って話す」の4つを学校や家庭で実践しようと考えた。

仕事の大変さややりがい、仕事をするにあたり大切だと思う資質を中学生から聞き取ることで、切実感を伴って学ぶことができるとともに、実生活に置き換えて小学生段階でできることは何かを考えやすくなった。また、中学生の発表をきっかけにT児は、第2回マンダラート

で、職業をスクールカウンセラー、花屋、保育士、アパレルショップ店員と変更した。自分の長所ややりがい等を見つめ直し、本当にやりたいことは何かを考えるきっかけともなった。T児のように1回目のマンダラートと2回目のマンダラートで職業が変化した児童は83%と大半を占めた。この結果から中学生の発表を聞き、仕事をより身近で現実的なものとして考

【資料4 T児の変容】

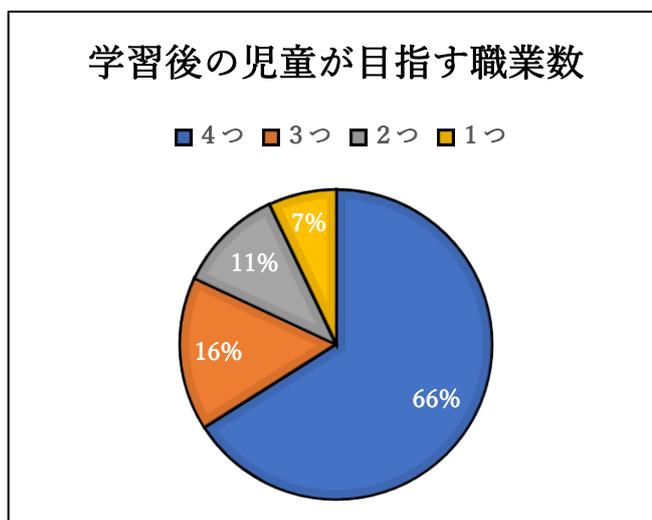


えるようになったと考える。

(エ) 成果と課題

自分の可能性に気付き、その可能性を生かすことができる職業を考えることを軸に学習を展開したが、キャリア教育を進めるにあたり、他者評価が必要不可欠だと分かった。児童一人の力では、長所を見付けたり、職業を見付け出したりすることは困難である。しかし、保護者や友達、教師の「芽線」を活用することで、自分では気付くことができなかつた一面に気付くことができた。4月と比較すると、将来の夢をもつことができなかつた84%の児童たちも全て将来の夢をもつことができるようになった。

【資料5 学習後の児童たちの実態】



Y児の振り返りに、「将来の夢をもていなかったけど、先生や友達のおかげで多くの夢をもつことができるようになってうれしかった。次の総合が楽しみだ。」と書かれていたことから、多くの人から認められる経験をし、自己有用感が高まるとともに、自分の将来に自信と期待をもって学習に取り組むことができることが分かった。

また、マンダラートを用いて自己分析を行うことで、従来考えていた将来の夢ではなく、より自分に適していたり、可能性を發揮できたりする職業を図式化したり整理したりして考えることができた。

さらに、中学生と連携し、職場体験で学んだことを聞くことで、漠然と捉えていた仕事を自分の能力や可能性と照らし合わせ、より現実的に将来について考えることができた。また、年齢が近い先輩の言葉で仕事に必要な資質等を聞くことで、小学生がこれからの生活で向上すべき資質を自分たちのレベルに置き換えて考えることがしやすくなった。

課題は、「芽線」の取扱い方である。今回の実践では、保護者の協力を得やすかつたため、児童たちは保護者の思いや本音を捉えながら学習を進めることができた。協力を得にくい保護者への対応を考える必要がある。また、教師の芽線が児童たちに受け入れられなかつたり、保護者に誤解を招いたりする可能性もあるので、「芽線」の扱い方には細心の注意が必要である。

また、中学生の発表を聞くために、職業調べから働く意義について児童たちの思考を切り替える必要が生じた。しかし、自然な流れで児童たちの思考を働く意義の方へ導くことができず、強制的に修正した場面があつた。職業調べをして、仕事内容等を把握した後、その仕事を何のためにするのか、その仕事をするためにどんなことが必要となるのかを児童たちの自然な思考の流れで考えさせるための手立てを考える必要がある。

(2) 実践2 <夢 なりたい自分を思い描いて努力していこう PART2>

(ア) 実践の概要

B 小学校 第6 学年 26 名 (男子 13 名、女子 13 名) を対象とし、総合的な学習の時間の単元名を「夢 なりたい自分を思い描いて努力していこう PART2」と題して展開した。

9、10、11 月を調査期間とし、自分を見つめ直す「自己分析シート」(筆者自作)を通して「なりたい自分」を設定することを目的とした。なお「自己分析シート」【資料6】は三段階で完成させていく形とした。まずは自分一人の力で黒字で記入し、2 回目は仲間からアドバイス等を得た上で青字で加筆し、3 回目はさらに仲間や先輩からアドバイス等を得た上で赤字で加筆して完成させることとした。

次に、3 色で書き込んだ「自己分析シート」を基に「なりたい自分」に向けての具体的な取組を決める「簡易版マンダラート」(筆者自作)を完成し、実践に移していくこととした。児童たちが「なりたい自分」を設定していく上で、何が設定の後押しをし、どのように変容していったのかを導いていくことに主眼を置いた。以下は、主な展開の流れである。

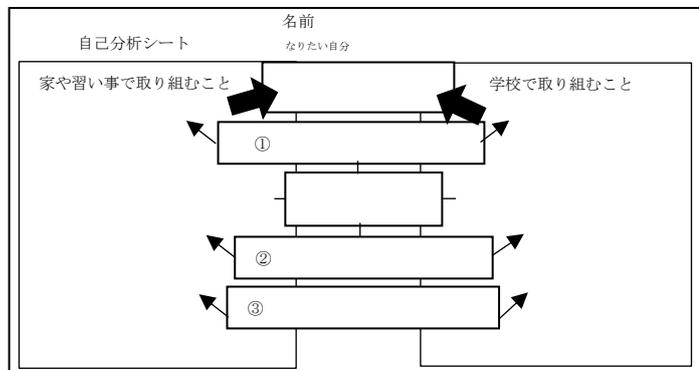
| |
|--|
| 2018 年 9 月・・・ 自己分析シートを自分一人で記入 (黒字で記入) |
| 2018 年 10 月・・・ 他の児童からのアドバイスを得た上で加筆 (青字で記入) |
| 2018 年 11 月・・・ 他の児童・先輩からのアドバイスを得た上でさらに加筆 (赤字で記入) |
| 2018 年 11 月・・・ 簡易版マンダラート記入・実践開始 |

児童が個人の手で自己分析シートを全て完成させることは困難であることを想定し、仲間や先輩からのアドバイスを注入していくこととした。さらには、児童たちが「なりたい自分」を徐々に思い描いていく、ひいてはキャリアビジョンを広げていくことをねらいとして展開した。なお、本稿におけるキャリアビジョンの捉えは、辻井・氷見 (2018) の「小学校段階におけるキャリア教育についての一考察」におけるキャリアビジョンの捉えと同様のものとする。

(イ) 自己分析シートによる「なりたい自分」の設定

自己分析シートの中央に「名前」「①家族から受け継いだ思い」「②好きなこと・気になること」「③自分のよいところ・直したいところ」「なりたい自分・職業」という欄を設けた。①、②、③の項目は、自己を見つめるためのものであり、それらと関連させ、「なりたい自分」に向かっていくことをイメージした。矢印はその流れを表している。また、シートの両端には「家や習い事で取り組むこと」「学校で取り組むこと」といった大きな欄を設け、後にマンダラートに具体的な取組を記入する

【資料6 自己分析シート】



また、シートの両端には「家や習い事で取り組むこと」「学校で取り組むこと」といった大きな欄を設け、後にマンダラートに具体的な取組を記入する

際のたたき台となることをねらった。

児童たちにはあえて、「中央の①②③、『なりたい自分・職業』のどの欄から書き始めてもよい。とにかく欄を埋めていく。」と指示した。また、計3回の取組で全ての欄を埋めることとし、1回目を黒字で、2回目を青字で、3回目を赤字で記入することも指示した。以下は3回の自己分析シートへの記入の実際である。

(第1回目の記入)

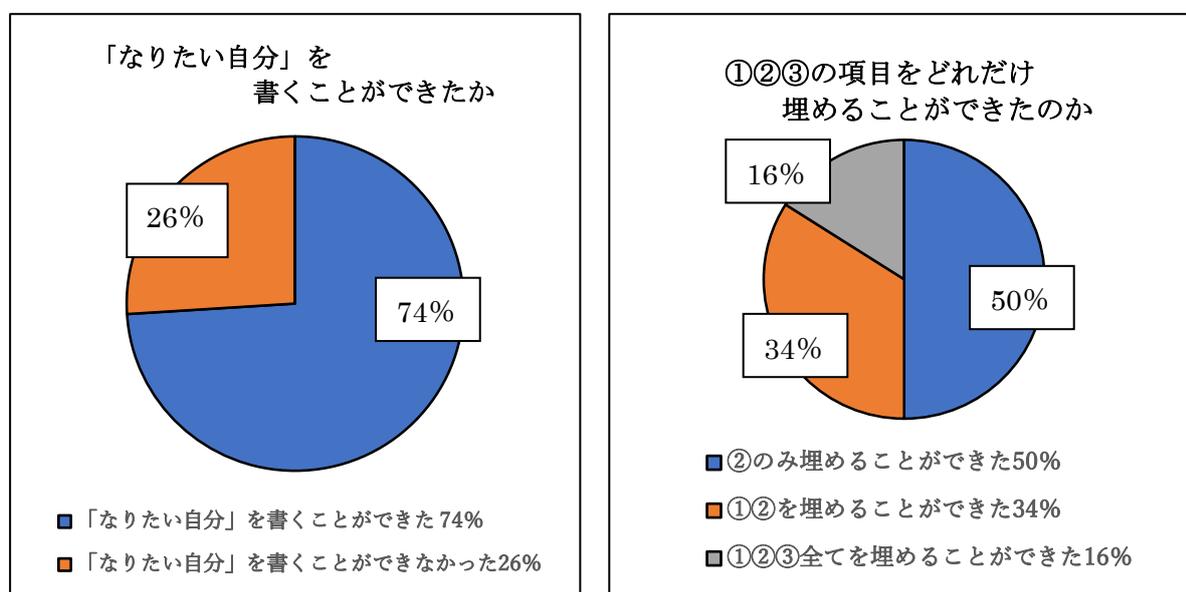
2018年9月に第1回目の自己分析シートへの記入を行った。シートの中央に位置する名前を書いた後は、①②③の項目、「なりたい自分・職業」のどの部分から書き始めてもよいこととした。また、両端の「家や習い事で取り組むこと」「学校で取り組むこと」の欄は書ければ書くとして、第1回目の記入で必ず書く必要はないと伝えた。しかし、記入していく順番を自由にしたもの、児童たちはなかなか埋められないでいるのが現状であった。

以下は、『なりたい自分』を書くことができたのか「①②③の項目をどれだけ埋めることができたのか」を調査した結果を円グラフにまとめたものである。

また、①②③の項目に絞ったのは、児童がどの程度自分自身を見つめることができるのかを導き出すため、言い換えれば本研究が重きを置く自己分析に焦点を当てていくためである。

【資料7「なりたい自分」を書くことができたか、

①②③の項目をどれだけ埋めることができたのかをまとめた結果】



児童たちの74%が「なりたい自分」を思い描いていることが分かった。しかし一方で、自分のよさにまだ気が付いていない、もしくは、何かしらの理由で自分の将来への展望を表せないでいる児童が26%いた。また、自分自身の将来や夢等について、初めて自身と向き合っ考えた児童もいたと考えられる。

「①②③の項目をどれだけ埋めることができたのか」について注目してみると、50%の

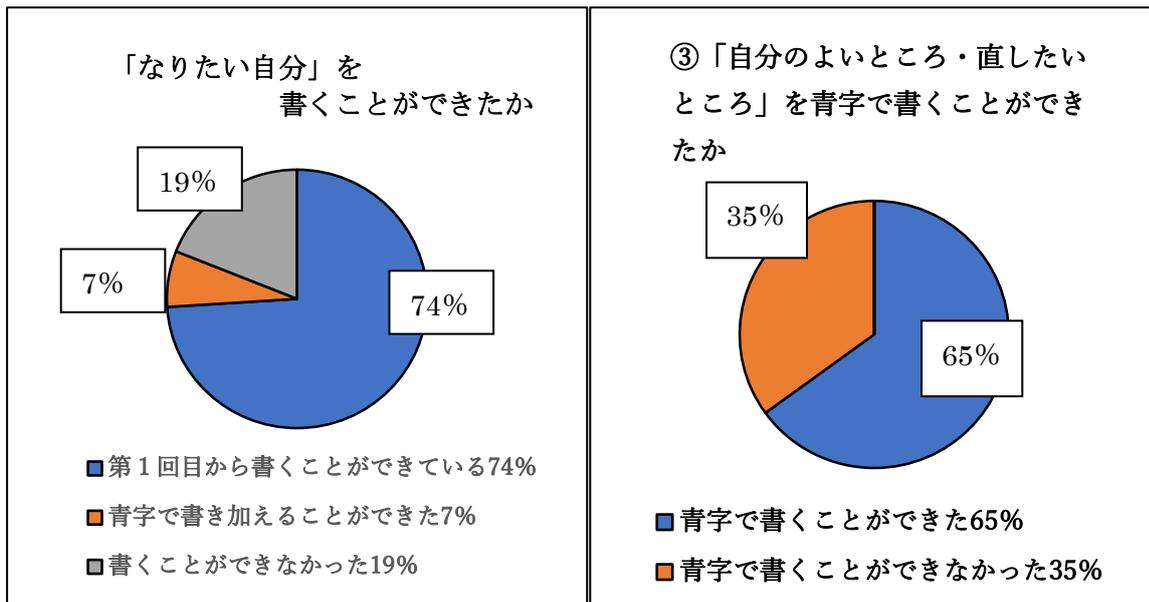
児童が②の項目のみを埋めることができたことが見て取れる。②は、自己の趣味・趣向を問うたものであり、児童たちには答えやすかったと考えられる。①は、家族のもつ人生観や職業観が児童のキャリアビジョンに及ぼす影響を見るために設定した。辻井・氷見 (2018) は、児童が保護者の職業観等に関する情報を保護者自身から得ることにより、自分自身のキャリアビジョンをポジティブに広げていくことを明らかにしている。本学級の児童たちは、その際の調査対象と同一であるため、34%の児童にはその影響が深く浸透していたと言えよう。一方、③の「自分のよいところ・直したいところ」については、数名が「すぐに怒るところ」「素直ではない」など、「直したいところ」を書くことができたが、「自分のよいところ」を書くことができた児童はいなかった。よって、①②③全ての項目を埋めることができた児童は16%と少なくなっており、児童が自分一人で自己の内面を見つめ、特に「自分のよさ」を導くことがいかに難しいかを表していると言える。

(第2回目の記入)

2018年10月に、第2回目の記入を行った。第2回目では、生活班(4人班が4つ、5人班が2つ)に分かれ、互いの自己分析シートを見てアドバイスできることを付箋に書いて渡す活動を取り入れた。その際、必ず自分以外の班のメンバー全員に対して付箋を渡すこととした(付箋に書くアドバイスの内容は、どの項目に対してのものでもよいこととした)。また、付箋を渡す際は、付箋を見せながら説明をすることも付け加えた。

さらに、「なりたい自分」が第1回目で決定している児童に対しては、シート両端の「家や習い事で取り組むこと」「学校で取り組むこと」についてのアドバイスをするように指示した。その後、各自が自己分析シートに取り入れたいアドバイスを青字で書き加える活動を取り入れた。

【資料8 「なりたい自分」を書くことができたか、③「自分のよいところ・直したいところ」を青字で書くことができたのかをまとめた結果】



上記は、青字を加えて『なりたい自分』を書くことができたか「③『自分のよいところ・直したいところ』を青字で書くことができたか」を円グラフにまとめたものである。

③の項目を抽出したのは、③が児童の内面に最も迫る項目であると考えたためである。

7%の児童が、アドバイスを得て「なりたい自分」を青字で書くことができた。よって、「なりたい自分」をこの時点で設定した児童が、第1回目の74%と第2回目の7%を加え、全体の81%となった。

以下は、「なりたい自分」を青字で書くことができたS児の自己分析シートから抽出した付箋の一部である。以後、S児の変容に沿って論じていく。

<S児がもらった付箋の一部>

- ・自分の気持ちをしっかりと伝えられるところがよいと思う
- ・しっかり者だと思う
- ・笑顔で元気なところがよい。そして、優しい
- ・面倒見がよいから、保育士や教師、塾の先生が似合いそう

S児は、以上のような付箋を受け取り、「なりたい自分」に「保育士・教師・塾の講師」と青字で記している。また、③の項目には「笑顔・元気・優しい」と青字で書いている。実際、S児は、学級内でもリーダー的存在であり、他の児童が戸惑う場面でさり気なく教えたり助けたりできる児童であるため、他の児童が日頃のS児の様子をよく見ており、その様子から想像できる将来像を伝えたと考えられる。

次に「③『自分のよいところ・直したいところ』を書くことができたか」に注目してみると、65%の児童が青字で書き加えることができたことが見て取れる。③の項目は、第1回目の記入の際に、84%の多数の児童が空欄であった項目であり、第1回目の16%と第2回目の65%を合わせると81%の児童が書くことができたことになる。また、「自分のよいところ」言い換えれば「よいところだと思う」ことを伝える付箋が65%の全ての児童に見られ、「直したいところ」、言い換えれば「直すべきだと思う」ことも他の児童から指摘された児童は、65%のうちの19%であった。つまり、仲間に対してポジティブな評価を伝える児童が多数いたことが伺える。

この結果から特筆すべきことは、「なりたい自分」を書くことができた81%と③「自分のよいところ・直したいところ」を書くことができた81%が合致している点である。この点からも、自己の内面に迫ることができてこそ、「なりたい自分」を設定できるということが導き出されたと考える。

(第3回目の記入)

2018年11月に、第3回目の記入を行った。第3回目は、前回の班内でアドバイスを書いた付箋を渡し合うところから、全員分の自己分析シートを掲示して学級全体で行うこととした。その際、出席番号の前後の児童には必ず付箋を書くこととし、すべての児童が必ずアドバイスをもらえるように配慮した。

また、付箋の交換をした後、先輩からのビデオメッセージを視聴する時間を設定した。先輩は、児童たちと同じ小学校を卒業し、かつて筆者が担任した大学1年生1人、高校2年生1人、中学3年生2人に依頼した。1人につき2分程度のメッセージを録画することとし、「今、自分ががんばっていること」「6年生に伝えたいこと」の2点を語ってもらうこととした。以下は、4人の先輩の詳細とメッセージを抽出したものである。

(大学1年生 男子)

理工学部に通っている。最初は大学に行くつもりはなかったが、高校の先生の推薦により、大学に入学した。今は、研究に没頭しており、将来は理工系の公務員になりたいと考えている。

自分は先生のアドバイスによって、進路が開けた。小学校のうち、先生が「勉強しろ」などうるさいかもしれないが、それはみんなのことを思っていることであり、先生のアドバイスを嫌がらず聞いた方がよい(高校2年生 男子)

普通科へ通っている。今は学習とバドミントンに打ち込んでいる。小中学校では剣道をしていたが、高校からはいろいろなことをやってみようとバドミントンをするに決めた。たくさんのすばらしい先生と出会い、自分も教師になりたいという夢をもった。

やりたいことや夢はどれだけ変わってもよいと思う。自分も、剣道をやめてバドミントンをするに決めた。いろいろなことを試す中で、夢を見つけてほしいと思う

(中学校3年生 男子)

生徒会長をしている。中学校は自分で決めることが増え、とても楽しい。将来の夢はパン屋だが、人に笑われることがよくある。でも、自分の夢だから気にしていない。その夢に近づくため、まずは高校受験をがんばろうと思う。

みんなは、夢の卵である。たくさんの可能性があるから、いろいろなことにチャレンジして楽しんで夢を見つけてほしい

(中学校3年生 女子)

夏休みに、ドイツでバレエを披露した。世界へ自分を表現できたことは、とてもよい経験となった。将来の夢はミュージカル女優等の表現者になりたい。そのためにまず、自分の進路への道である受験をがんばろうと思う。

いろいろなことにチャレンジしてほしい。たとえ失敗しても、チャレンジしたことに価値があり、何か残ると思う。応援している

仲間からの付箋に加え、以上のようなメッセージを受け取り、自己分析シートに赤字で書き加えた。①「家族から受け継いだ思い」は1学期から時間も経過していたこともあり、最後まで埋まらない児童もいた。それを除けば、両端の取組も含め、全ての児童が欄を埋め、かつ「なりたい自分」を設定することができた。以下は、赤字で書き込みを終えた前述のS児の振り返りである。

(S児の振り返り)

これから夢が変わっていくかもしれないけれど、今せつかく「保育士」という夢ができたから、この夢に向かって今できることをしっかりとやっていきたいと思う

S児は、この学習の最初の段階では、「なりたい自分」を設定できなかった。第2回目の他の児童からのアドバイスによって、自らの内面を見つめ、「保育士」という夢をもつに至った。第3回目には、両端の欄に「保育士」へ向けた具体的な取組が赤字で書き込まれていた。また、振り返りからも、未来志向でメッセージをくれた先輩たちの言葉に大きく感化されたことも見て取れる。

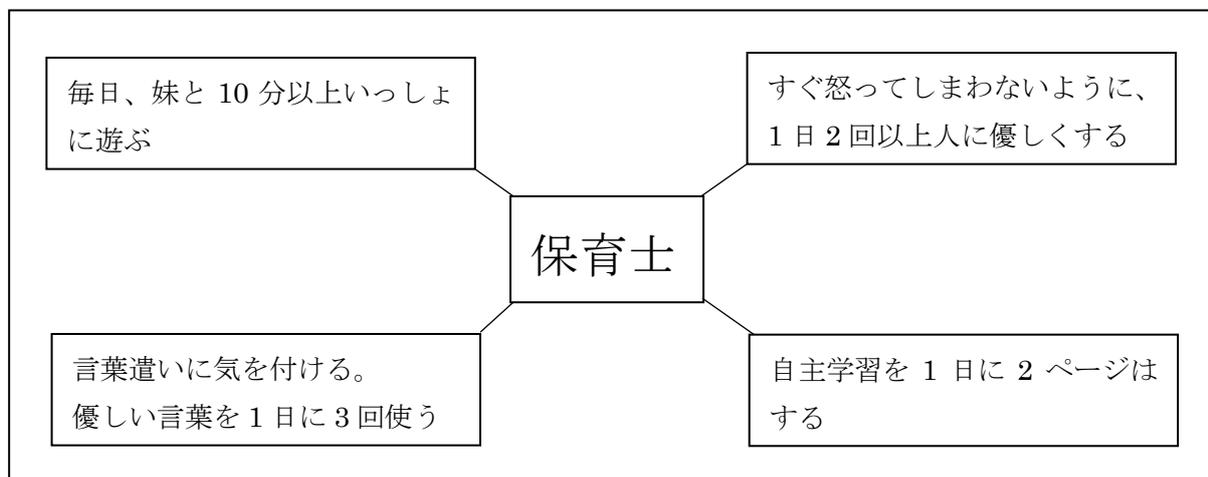
(ウ) 簡易版マンガラート

本学級の児童たちの多くは決して語彙が豊富というわけではなく、国語科等の授業にお

いて長文を書く際にもなかなか書き出すことができない場合が多い。そこで、高等学校等で使用される本来の 81 マスのマンダラートのマスを 4 マスに絞り込み、語彙が豊富でなくとも取り組みやすいように筆者が「簡易版のマンダラート」を自作することにした。

取組を書き込む 4 マスの欄には、学校で取り組んでいくことを必ず入れること、学習に関することを必ず入れること、家庭や習い事で取り組むことを必ず入れること、自己の内面を鍛える取組を必ず入れることを条件とした。以上の 4 つの条件に絞り込んだ理由は、「なりたい自分」を目指すこと自体を、日頃の学習意欲の向上や、生活を律していくことにつなげていきたいという目論見があったからである。また、できる限り目標を数値化して進捗状況を振り返りやすくするように助言した。以下は、S 児が完成させた「簡易版マンダラート」をそのまま筆者が打ち出したものである。

【資料 9 S 児が作成した『簡易版マンダラート』】



S 児は、第 1 回目の記入の際に③「自分のよいところ・直したいところ」の欄に「すぐに怒ってしまうところ」と記していた。保育士を目指すにあたり、自身が短所と考える箇所をどうにか改善していこうという気持ちがマンダラートから窺える。

以下は、担任が S 児に対して 5 月に設定した「芽線」である。

(S 児への芽線)

何かしらの「なりたい自分」を描こうとしている。いろいろな活動に意欲をもって取り組んでいる。学級内のいろいろなことに気が付き、全体を見て動くことができる。児童会において、学校全体のために働くこともできる。教師タイプかもしれない

担任となって一人一人の様子を観察し、主観的に描いた芽線ではあるが、学級における S 児に対して担任がもった印象と同様の印象を、付箋を S 児に渡した児童たちも抱いていたに違いない。筆者は S 児に対して直接的に「芽線」を伝えてはいないが、周りの仲間から同様の印象を伝えられ、自身のよさ等に自信をもち、具体的に認識して「なりたい自分」を設定するに至ったのではないかと考える。

S 児同様、全ての児童が自分なりのマンダラートを完成させることができた。取組の項

目は4箇所と少ないが、このわずか4箇所を書くことを導き出すことも、小学校高学年段階の児童たちには困難であり、長い自問自答の末に生み出されていった印象であった。いずれにせよ、全ての児童が「簡易版マンダラート」を完成させ、実際の取組に移ることができた。また、「簡易版マンダラート」を印刷して各自に配布し、家庭内の自室に張り出し、自身の決めた取組を忘れず、実践していくように指示した。

(エ) まとめ

小学校高学年段階の児童各人が自己を見つめ、自身の趣味趣向を書き出すことはどうにかできるが、自身の長所や短所を言葉にすることは難しいことが分かった。また、第1回目の「自己分析シート」の書き込みで74%の児童が「なりたい自分」を書くことができたが、それも漠然とした願望であり、自身の内面と照らして今一度考えるよい機会となったと考える。一方、「なりたい自分」をすぐには書けなかった児童たちは、他の児童からのアドバイスや先輩の後押しを得ることにより、自分を深く見つめ、「なりたい自分」を設定することができたと考える。

つまり、小学校高学年段階の児童が個人の力で「自己分析」することは極めて困難であり、第三者（他の児童、先輩等）から自己のよさ等を認めてもらうこと、言い換えれば「他者評価」を得ることによって自分を深く見つめることができるということではないだろうか。それは、「自分は今現在、このようなよさがある」という自己肯定感の高まりとも言えると考えられる。

本実践により、「他者評価」によって「自己肯定感」を高め、かつ「自己分析」が促進していく。そして、今現在の自己を深く認めた上で初めて「なりたい自分」を思い描くことができることが明らかとなった。

(3) 実践3 <将来へ なりたい自分を思い描こう ～磨こう！自分の可能性～>

(ア) 実践の概要

C小学校 第6学年 15名（男子8名、女子7名）を対象とし、総合的な学習の時間の単元名を「将来へ なりたい自分を思い描こう ～磨こう！自分の可能性～」と題して展開した。調査期間は、11月、12月、1月の3か月である。

「ライフプランシート」（筆者自作）の作成、「働くこと」について家族との語らいの場の設定、自己分析ワークシートの記入及び児童相互によるアドバイスと教師の芽線（前述）による声掛けの3つを通して、具体的な「なりたい自分」を設定することを第一の目的とした。

次に、「なりたい自分」に向けての取組を決めるために、プロ野球選手である大谷翔平氏の9マスの目標達成シート（以降、マンダラートと記述）に、各自が細分化した目標を立て、実践に移していくこととした。

それぞれの取組の過程で、自由記述によるアンケート調査を行い、各取組の効果について検証して考察をする。児童が、「なりたい自分」を設定する上で、どのようなことが後

押しをしたのか、さらに、「マンダラート」への記入及び「マンダラート」を意識して生活することで、児童各々の生活への意識がどのように変容していったのかを導いていく。

以下は、主な展開の流れである。

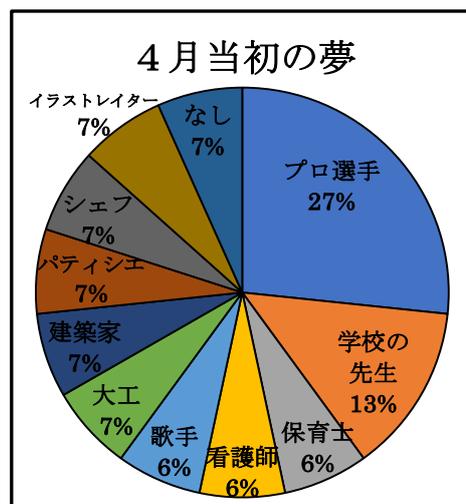
2018年11月・・・「ライフプランシート」の記入（以降、順次加筆）
 2018年11月・・・「働くこと」について、家族との語らいの場の設定
 2018年12月・・・他の児童からのアドバイスと教師からの芽線を得た上で「なりたい自分」を設定
 2018年12月・・・「マンダラート」への記入・実践開始
 2019年 1月・・・自由記述のアンケートを実施

2018年11月・・・「ライフプランシート」の記入（以降、順次加筆）
 2018年11月・・・「働くこと」について、家族との語らいの場の設定
 2018年12月・・・他の児童からのアドバイスと教師からの芽線を得た上で「なりたい自分」を設定
 2018年12月・・・「マンダラート」への記入・実践開始
 2019年 1月・・・自由記述のアンケートを実施

(イ) 始めに

4月に、将来の夢について児童に尋ねた。すると、93%が、何かしらの将来の夢をもつことができていた。これは、本児童が今までに将来の自分の夢を考える機会を学校で設定されてきたからだと考えられる。ここで設定された夢の内容を見てみると、「プロ野球選手」や「プロバレーボール選手」といった「プロ選手」や、「学校の先生」「保育士」といった自分にとって身近な存在である職業が多いことが分かる。この時点での夢は、自分の将来の職業といった現実味を帯びたものとしてではなく、あこがれとして要素が大きいようであった。そこで、総合的な学習の時間を通して、今の自分を見つめることからスタートし、自分の将来についてのキャリアビジョンを描き、そこに向かって、日々、今の自分を高めていけるようにしたいと考えた。

【資料10 4月当初の夢の結果】



(ウ) 自己の将来を見つめ始める「ライフプランシート」の記入

学習の最初に、今から5年後、10年後、その先の自分の将来のライフプランを書くようにした。すると、100%の児童がこのライフプランを、全く書くことができなかった。4月当初に、自分の夢を多くの児童が記述できていたのだが、いざ将来の自分の姿となると、具体的に想像することができない。これは、この時点での「夢」が、まだあこがれで理想

のものであって、現在の自分からつながっていくものとしての意識を持っていないことが原因として考えられる。さらに、この時点の児童は、これから先の将来についての情報をほぼ得ていないということも原因ではないかと考える。しかし、このライフプランシートを書くという取組をしたことで、今を刹那的に生きている児童にとって、今が積み重なって、将来の自分へとつながっていくという意識をもつきっかけになった。同時に、自分の将来について本気で向き合っただけで考えていこうという意識をもつきっかけになった。

以下は、自由記述による児童の感想である。

- ・これからのことを深く考えていなかったで、しっかりと考えて、これからの将来の夢を考えていきたい
- ・すらすら書けると思っていたけれど、なかなか書けなかったで、将来について考えるのは難しいと思った。また、家でじっくりと深く考えてみたい
- ・今から考えていくことで、将来の夢に向かって一歩や二歩、段々とその夢に向かっていくと思うので、近づいていけるようにしたい

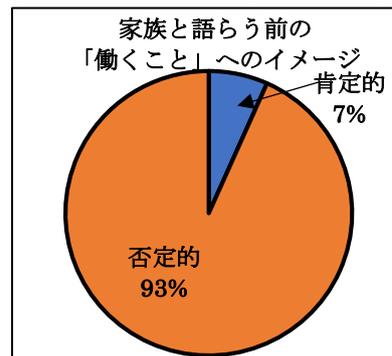
この「ライフプランシート」は、後の学習の途中で自由に書き加えていくようにした。単元の後半には、5年後については73%が、10年後については80%の児童が何かしら記入し、自分の将来への道筋について想像を巡らせて考えることができた。

(エ) 「働くこと」について家族と語らうことの効果

辻井・氷見(2018)では、「働くこと」に対して、身近な家族と語らう機会をもつことで、肯定的なイメージをもつことにつながることを述べている。そこで、まず、児童が「働くこと」に対してどのようなイメージをもっているのかについて調べ、次に、「働くこと」について家族と語らう機会を設けることで、身近に働く家族の思いを具体的に聞くことができ、肯定的なイメージをもつことができるのではないかと考えた。

まず、家族と語らう前に、「家族の職業についてどのように思っているか」をワークシートに記入させたところ、「大変そう、難しそう」という印象をもつ児童が86%であった。この時点での「働くこと」に対するイメージについて挙手により調べたところ、93%が否定的なイメージをもっていた。多くの児童は、「家族の仕事の大まかな内容」や、「出退勤の時刻」、「家で過ごす様子」からこのようなイメージをもっていたようだ。一方で、「働くこと」に肯定的なイメージをもっていた児童は、家族と一緒に自分自身が働き、身近で家族の働く姿や客の喜ぶ姿を見ている経験を積んでいる者であった。

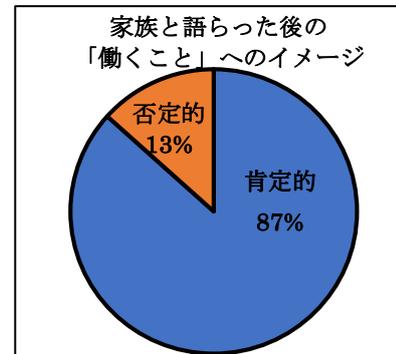
【資料II 家族と語らう前の「働くこと」へのイメージの結果】



この後、「働くこと」について家族にインタビューをして語らう時間を設け、再度、「自分の将来の仕事についてどのように考えるようになったか」をワークシートに記入させた。その結果、「大変だけど喜びがある」と考えた児童が93%であった。また、家族の思いを受け継いで「自分も人を喜ばせるような仕事に就きたい」と考えた児童が14%いた。この時点での「働くこと」に対するイメージを挙手により調べたところ、87%が肯定的なイメージをもっていた。一方で、否定的なイメージのままであった13%の児童に尋ねたところ、

「保護者が語らいの時間を十分に取れず聞きたいことを聞けなかった」や、「家族に聞くと、子供を養うために少しでもお金をかせぐために働いている」と回答をしていたことが分かった。

【資料12 家族と語らった後の「働くこと」へのイメージの結果】



これらのことから、辻井・氷見(2018)の研究でも述べられているように、6年生段階の児童は、働くことに対して十分な知識や経験をもっておらず、身近な家族の、家での様子や家族から見聞きしたことを基に「働くこと」に対するイメージをつくっていることが再度確認できた。そして、家族と「職業について」や「働くこと」について語らうことや、家族の思いを聞くこと、仕事を一緒に経験してみることで、働くことに対して「大変だ」といった否定的な面だけではなく、「喜びややりがい」といった肯定的な面も気付いていった。このように、身近な家族と語らうことを通して家族の生き方やものの考え方に触れる機会を設けたことは、児童にとって価値があったようで、働く家族への感謝の思いを新たにもった児童もいた。一方で、十分に家族と語らう機会が設けられない場合等、家庭によっては配慮が必要な場合があることも明らかとなった。この点について、教師は学級の実態を十分に捉えてから家庭に協力を得ることや、家庭に調査の意図を十分に伝えてから行うことが必要となるであろう。

(オ) 自分のよさを見つめる自己分析ワークシートと、他者評価の効果

「なりたい自分」を思い描くにあたって、職業調べと並行して、自分のよさを見つめるための、以下の2種類の自己分析ワークシートの記入を行った。

ワークシート①

自分の好きなことや得意なこと等の14の項目について、自由記述で答える
 「好きな遊び」、「好きな食べ物」、「得意なこと」、「好きなスポーツ」、「好きな歌」、「目標にしたい人」、「最近心にのこった本」、「好きな言葉」、「最近感動したこと感激したこと」、「自分の『いいな』と思っているところ」、「自分の直したいところ」、「いま夢中になっているところ」、「一番大切なもの」、「将来の夢」

ワークシート②

自分の性格面や行動面からのよさを捉える43の項目について◎○△で答える
 「気がきく」、「がまん強い」、「友達思い」、「年下の子にやさしい」、「おもしろい」、「いつも元気」、「まじめ」、「何でも一生懸命にやる」、「明るい」、「すなお」、「いつも笑顔で笑っている」、「食べ物の好き嫌いが無い」、「あいさつができる」、「ありがとう・ごめんねが言える」、「人の悪口を言わない」、「忘れ物をしない」、「そうじがていねい」等

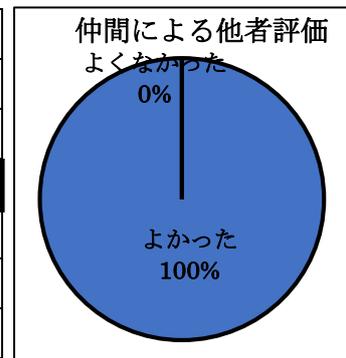
ワークシート①について、当初、自分を俯瞰して見つめたことがない多くの児童は、ほとんど書くことができなかった。しかし、学習を進めながら徐々に書き足していくことで、単元の最後には平均78%の項目を記入した。好きなことや得意なことといったものは、もちろんそのときによって変化していくものであるが、このように自分のよさを理解する上での視点を与えたことにより、自己をメタ認知して捉えるきっかけとなり、その後の「なりたい自分」について、視野を広げていく際のヒントになっていったようだ。

次に、教室の他の児童から取組のよさを付箋で書いて伝え合う機会を、2度設けた。当初は1度のみこの機会を設ける予定であったが、児童からの要望により2度設けた。大半の児童が1回という短時間では仲間の取組のよさを伝えきれないと答え、中には、家庭学習として仲間のよさをノートに書いてきた児童もいた。この取組では、1人につき平均12.5人から、よさを書いた付箋を受け取った。自分以外の89.5%の児童から、よさを書いた付箋を受け取ったことになる。自分が受け取ると、今度は伝えてくれた相手に伝えようというよい循環になり、その結果このような高い割合につながったのではないかと考える。また本学級では、日常的に帰りの会等で、仲間の取組のよさを伝え合う機会が設けられており、このことが高い割合につながったのではないかと考える。

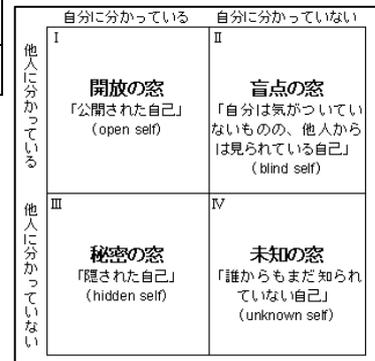
【資料13 仲間からの付箋を受け取った後の自由記述での感想の累計結果】

| 自由記述の内容 | 割合(%) |
|-------------------------|-----------|
| うれしい気持ちになった | 60 |
| また友達に書いて伝えたい | 40 |
| 自分では気付けないよさに気付けた | 40 |
| たくさん伝えることができた | 20 |
| みんなによいところがあることに気付いた | 13 |
| よさを気付ける友達がすごいと思った | 13 |
| このクラスでよかった、仲が深まった | 13 |
| 将来の職業選びのヒントになった | 6 |
| よいところをもっと増やしたいと思った | 6 |

【資料14 仲間による他者評価の結果】



【資料15 ジョハリの窓】

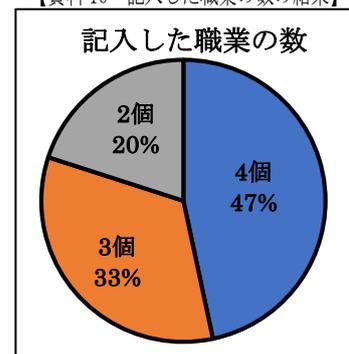


この仲間による他者評価について、自由記述により児童に感想を求めたところ、「やってよかった」と答えた児童は100%であった。また、感想の内容の内訳を類型化すると、以下のようになった。

このように、「うれしい気持ちになった」や「また友達に書いて伝えたい」といった、この取組自体の情動的な効果を表す内容が多いことが分かる。さらに40%の児童が「自分では気付かなかったよさに気付くことができた」と答えている。ジョハリ(1955)は、自己には4つの窓が存在すると述べている。この他者評価の取組により、40%の児童が「盲点の窓」に気付くことができ、自己の可能性を広げることができたと考えられる。

次に、前述の実践(実践1「見つけよう！自分の『可能性』」)における「自己分析のマンダラート」を活用し、なりたい職業について書くようにした。この「自己分析のマンダラート」は、職業について4つの枠が設けられている。自分の将来の職業について1つは考えていたのだが、複数の職業について考えるはこなかったため、ほとんどの児童が複数の職業を書くことができなかった。ここで再度、仲間による他者評価を

【資料16 記入した職業の数の結果】



取り入れた。教室の仲間に、相応しいと思われる職業を付箋に書き、その付箋を渡す際には、どうしてその職業が相応しいと思ったのかの理由を口頭で伝えるようにした。その結果、平均 7.8 枚の付箋を仲間からもらい、相応しい職業について 2～9 種類の助言を受け取った。

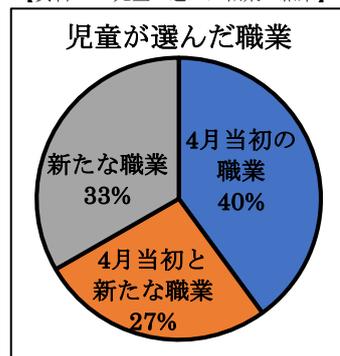
さらに、教師の「芽線」により、一人につき 3 種類の職業とそう考える理由を付箋に書いて伝えた。この教師が伝える「芽線」は、教師から見た児童の特性やよさを生かした視点で、あえて児童が本来考えている職業とは異なる職業を伝えるようにした。

このようにして、再度「自己分析マンダラート」の記入に取り組んだところ、100%の児童が、複数の職業を書くことができた。これらのことから、「他者の評価」や、「教師が芽線を伝えること」は、児童が「なりたい自分」の視点を広げ、自己の将来の職業を考える際に効果があったのではないかと考える。

さらにその後、現時点での「なりたい自分」について、記入した複数の職業の中から選んで 1～2 つに焦点化を図った。その結果、「4 月当初に思い描いた職業を選んだ児童」は 40%、

「4 月当初に選んだ職業に付け加えて新たな職業を付け加えた児童」が 27%、「新たな職業を選んだ児童」が 33%であった。これらの結果からも、他の児童から評価を得ることや教師から「芽線」を伝えられることが、児童が将来の職業について視点を広げることの影響を与えることが明らかとなった。

【資料 17 児童が選んだ職業の結果】



(カ) 「なりたい自分」に向けて目標を細分化した「マンダラート」の作成と実践

「なりたい自分」について設定した後に、大谷翔平選手が高校生のときに書いた目標達成シート（以降「マンダラート」と記述）を紹介し、各々の児童が記入して実践することを試みた。大谷選手の「マンダラート」は、目標を達成するために、内側の 8 つのマス目に目標を設定し、その 8 つの目標の各々についてさらに 8 つに細分化した目標を立てた合計 81 マス目標を書いたものである。大谷選手は、これらの細分化された目標について、期間を設定し、自己の取組についてノートに振り返ることを行っている。

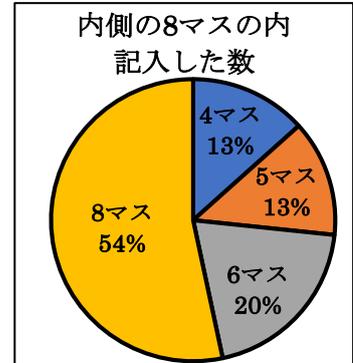
当初、この「マンダラート」の記入をそのまま小学生が取り組むことは、負担が大きいのではないかと考えた。そこで、「学校」「家」「職業（就くには、就いた後）」、「人間力」といった 4 つの観点を児童に与え、この 4 つの観点でのみ記入することにした。一方で、児童に配布する「マンダラート」には全てのマス目はそのまま残しておき、個人の希望によっては、適宜書き加えてよいことにした。大谷選手の「マンダラート」は、事前に、モデルとして参考にできるように、各個人に渡しておいた。このようにして取り組み始め、記入の途中段階のものを教室に掲示して見合うことができるようにしたり、必要に応じて友達と助言し合う機会を設けたりして、数日の間をおき、記入する機会を 2 度設けた。

その結果、内側の8マスについては100%の児童が4マス以上の記入をした。また、8マス全てについて記入した児童は54%であった。全81マスで見ると、最小では31マスの記入がされ、全てを記入した児童は13%いた。

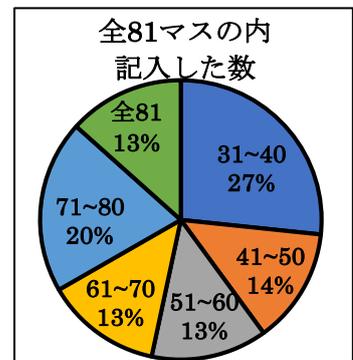
【資料18 児童が記入した「マンダラート」】

| 将来へ | | しかりと教える児童対「マンダラート」 | | | | | | | |
|---|---|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|--|
| 上の方には 敬語をの び | 人を尊敬 する | 感謝 | 明るく 笑顔を みせる | 失敗を 悔い 改む | 丁寧な 言葉遣 いをする | 手を洗 う | 自分の 意見を 伝える | 努力 | |
| 目を つぶり が 開く。 | 礼儀 正しく おぼ やか | しせい | 自分 から 進んで 行動す る | 勇気 | 自分 から 声を 出す | 色を 使っ て 表現す る | 勉強 | まじ まじ と 見る | |
| 人の こと を 思 う。 | 人を 思い やる | あいさ つ | 自分 から 話 す | 勉強 する | 自分 に 自信 を持 つ | 自分 から 話 す | 自信 を持 つ | おぼ やか に する | |
| 30分 以上 毎日 読む。 | 10分 以上 毎日 読む | 礼儀 正しく | 勇気 | 勉強 | 自分 から 話 す | 自分 から 話 す | 自分 から 話 す | まじ まじ と 見る | |
| 体が パリ パリ する | 運動 する | 運動 | 運動 | 運動 | コ ミュ ニ ケ シ ョ ン | コ ミュ ニ ケ シ ョ ン | コ ミュ ニ ケ シ ョ ン | コ ミュ ニ ケ シ ョ ン | |
| い か ど か に お も い や さ く | い か ど か に お も い や さ く | 30分 以上 毎日 読む | 生活 習慣 | 生活 習慣 | 生活 習慣 | 生活 習慣 | 生活 習慣 | 生活 習慣 | |
| マ ガ シ ン ガ を 読 む | 本 を 読 む | 本 を 読 む | 本 を 読 む | 本 を 読 む | 本 を 読 む | 本 を 読 む | 本 を 読 む | 本 を 読 む | |
| お お い い | お お い い | お お い い | お お い い | お お い い | お お い い | お お い い | お お い い | お お い い | |
| 自 ら 教 育 を 行 う | 自 ら 教 育 を 行 う | 自 ら 教 育 を 行 う | 自 ら 教 育 を 行 う | 自 ら 教 育 を 行 う | 自 ら 教 育 を 行 う | 自 ら 教 育 を 行 う | 自 ら 教 育 を 行 う | 自 ら 教 育 を 行 う | |

【資料19 内側の8マスの内記入した数の結果】



【資料20 全81マスの内記入した数の結果】



このことから、児童は、教師の予想を大きく上回って「なりたい自分」の実現に向けて、細分化した目標を立てることができたと考えられる。

当初、小学生がこの「マンダラート」に記入していくことは難しいのではないかと考えていた。しかし、取組の様子を観察すると、「なりたい自分」に向かうための目標を、様々な生活場面から想像して見つけたり、物事に取り組む際の心情的な側面等から考えたりして、多面的に見つけ出そうとする姿が見て取れた。例えば、将来の職業が同じ児童同士が互いの「マンダラート」を見合せて相談したり、再度、職業を調べたときの本を読み返してみたりする姿である。さらに、マンダラートの中心には、「〇〇な(職業)」といったように、職業に就いた後に大切にしたい価値を付け加えることで、より具体的に目指す姿を思い描くことができ、細分化した目標を立てることができたと考える。

このように、あえて目標にする数を絞らない「マンダラート」に取り組んだことで、「なりたい自分」という理想に近づいていくために、それに関連する事柄を生活全般から洗い出して考えてみることにつながった。つまり「81マスのマンダラートに記入する」という取組を通して、「なりたい自分」といった理想を、現実の様々な具体的生活場面に引き寄せて考えることができたことに価値があったということである。

その後、記入した「マンダラート」を、児童が毎日目にする「生活ノート」に貼るようにした。そして、生活の中で「マンダラート」に書いたことを意識したり、毎日一つ目標を定めて生活をして振り返ったりするように促した。最後に、「将来に向けて、『マンダラート』の記入に取り組んでみて」と、「『マンダラート』を意識して生活をしてみて」という項目で、自由記述により感想を書かせた。以下はその感想の抜粋である。

【資料 21 「将来に向けて、『マンダラート』の記入に取り組んでみて」の感想の一部】

- ・すごく自分の将来に近づけた気がした。そのかわり、自分にはまだ足りてない部分も分かった
- ・将来のことについて、深く考えることができたのでよかった。マンダラートで、自分がしないといけないこと、大切なことが分かったので、これからも取り組みを続けていきたい
- ・最初は何を書いたらよいか分からなくて難しかったけれど、書いていくうちにとても面白くて楽しくなってきた。生活ノートに貼ると、いつも見られるし、目当ても立てやすくてよかった

【資料 22 「『マンダラート』を意識して生活をしてみて」の感想の一部】

- ・ただ、だらだらと何も意識せずに一日を過ごすよりも、意識して一日を過ごしたほうが自分のためになったと思った
- ・意外と難しかったけれど、意識してみたり、もう一度見直してやってみたりすると続けられた。小さなことでも、今からやっていけばそれがずっと続くようなものになると思うし、しっかりと夢をもったので、休みの日も続けたい
- ・マンダラートを作って、目当てがあるから「やるぞ!」という気持ちになった。実際に行動ができてよかった

このように、「マンダラート」を記入したことで、「なりたい自分」に近づいていくためには何が必要か、自分に足りていない部分とは何なのかといったことに児童一人一人が気付くことができた。また、最初は記入が難しくても、もう一度その職業について調べたり、他者と関わりながら時間をかけて書いていったりすることで、児童は自己の将来について深く考える姿勢を培っていったと考える。さらに、「マンダラート」を意識して生活することで、児童が自分を律して生活する様子が見られたり、変容していく自分に気付いたりしていく様子が見られた。

(キ) まとめ

導入で「ライフプランシート」の記入といった自己分析を試みることで、今の日々の生活の積み重ねが自分の将来につながるという意識が生まれ、夢を単にあこがれのものとしてではなく、本当に将来の「なりたい自分」について考えて直視していこうとする意欲を生んだ。さらに、「自己分析ワークシート」への記入により自分のよさに気付いたり、「なりたい自分」を思い描くヒントになったりした。そして、「マンダラート」の記入により「なりたい自分」を目指すための細かな目標を設定するとともに、自己に足りないものやできていることを実感し、自己の成長を実感することにつながった。このように、「ライフプランシート」「自己分析ワークシート」「マンダラート」の記入による、自己分析の機会により、「今の自分」や「なりたい自分」についてよく理解し、次への意欲へとつながっていったと言える。

次に、身近な大人である家族に「働くこと」について語らう他者評価を取り入れることで、働くことに肯定的なイメージをもつことができた。また、児童同士が互いのよいところを伝え合ったり、教師が芽線を伝えたりすることで、自分一人では気付かなかった働くことでの喜びを知ったり、自分のよさや自分に適した職業についての幅を広げたりすることにつながった。

(4) 実践4 <『自分を見つめよう』1/2 成人式>**(ア) 調査対象**

D 小学校 第4学年 38名(男子19名、女子19名)を対象に総合的な学習の時間と特別活動で展開した。

(イ) 実践の概要

第4学年は、中学年後半であり、高学年への準備段階の時期である。国立教育政策研究所(2012)によれば、中学年のキャリア発達課題は、「友達のよさを認め、協力して活動する中で、自分の持ち味や役割を自覚することができるようにする」(※④)ことである。

また、児美川(2006)は、キャリア教育の目的をキャリア発達であると述べ、キャリア発達を「子どもたちがその発達段階に応じて、自らのキャリアを発達させていくこと、つまり、それぞれの発達段階に即して、さまざまな立場や役割を担えるようになり、それらを自己のなかに位置づけ、意味づけていくことができるようになるということ」(※⑤)と定義している。

本実践では、「自分の持ち味や役割を自覚」したり、「さまざまな立場や役割を担う中で、それらを自己の中に位置づけ、意味づけ」たりしていくことを目的とし、特別活動と総合的な学習の時間を合わせ、単元構成した。

※④ 「自分に気付き、未来を築くキャリア教育 小学校におけるキャリア教育推進のために」国立教育研究所生徒指導研究センター,2012年

※⑤ 「日本における『キャリア教育』実践の展開(1)-小学校におけるキャリア教育をどうすすめるか-」児美川孝一郎,『生涯学習とキャリアデザイン3』pp..49-66,法政大学キャリアデザイン学会,2006年

(ウ) 実践4-1 <『自分を見つめよう』これまでの年とこれからの10年について考えよう(特別活動)全2時間>

本校の年間教育計画には、3学期に「1/2 成人式」が位置付けられている。まず実践1では、1/2 成人式をただ行うのではなく、児童たちには節目の年(これまで生きてきた10年と、これから生きていく10年のちょうど間)であることを投げかけた。今の自分を中心に据え、過去10年の自分とこの先の10年について考えることを通して、自分が好きだと感じていることや、興味があること、できるようになったこと、できるようになりたいこと、これからどう生きていくか、どんな大人になりたいかということについて考えていく契機とした。

「これまでの10年について自分をふりかえろう(今の自分)」では、「得意、好き」なこと、「楽しかった出来事」「できるようになったこと」「できるようになりたいこと・夢」の4項目について書いた。そして、「これからの自分を描いてみよう(将来の自分)」では、「やりたいこと」「人のためにやりたいこと」「どんな人になりたい?」「今からできることは?」の4項目について書いた。4項目について、マングラート4マスを設け、今の自分で16マス、将来の自分で16マスの全32マスを書く活動にした。

以下に「今の自分」に関する反応例を挙げる。

| | |
|--|--|
| 得意なこと・好きなこと (今の自分) | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・テレビキャラクター、アニメキャラクター等のキャラクター ・サッカー、野球、水泳、バスケットボール、ドッジボール、ソフトボール、新体操等 (スポーツ) ・犬、猫、ハムスター (動物) ・ピザまん、ポテトチップ、じゃがりこ、寿司等 (食べ物) ・ゲーム・ピアノ、そろばん、タイピング、速読等 (習い事) ・遊び、スライム、料理、買い物、歴史、白バイ、鉄道写真、絵を描く、マンガを描く、ヨーヨー、恐竜、緑色、宝石、鉄棒、ぬいぐるみ等 (趣味や好きな物) | |
| 楽しかった出来事 (今の自分) | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・Aさんと一緒に遊んだ、BさんやCさんとお泊まり会をした、宿泊学習、友達とプールで遊んだ、友達と映画に行った、友達とお風呂に行った等 (友達との交流体験) ・家族旅行 (テーマパーク、温泉、スポーツ観戦、動物園、駅巡り、海、アメリカ、ライブ) ・10才の誕生日、ウニを食べた、ひつまぶしを食べた等 (子供にとって特別な体験) ・買ってもらった (ラジコン、ゲーム、歌手のキーホルダー、好きな漫画) ・盗塁できた、ピッチャーをした、初ヒットを打った、テニス、英語の発表会で賞を取った (習い事) | |
| できるようになったこと (今の自分) | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・壁倒立、のじた踊り、補助輪なしで自転車に乗る、二重とび、さか上がり、クロール 25m、長縄連続跳び等 (運動・身体能力の向上) ・タヤ交換の手伝い、電車に一人で乗る、家の手伝い、玉子焼を作る、ミシ等 (大人の手を借りずに自分でできるようになったこと) ・書初、習字、そろばん、ヒットを打てる、リフティング、レイアップ、英語等 (習い事の上達) | |
| できるようになりたいこと・夢 (今の自分) | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・芸能人・有名人・スポーツ選手・宇宙人に会う ・旅行 (外国、宇宙、世界一周、国内) ・プロ野球選手、医者、YouTuber、声優、研究者、警察官、プロバスケットボール選手、漫画家、古生物学者、大工、看護師、自営業、テーマパーク職員、助産士 (職業) ・スキーのマガルハッチを取る、長縄の連続跳びに入る、一輪車に乗る、側転、スノーボードの技をたくさんできる (運動技能の向上) ・ペットを飼う、母親より身長が高くなる、ハンゾージャンプをする、宝くじを当てる、弟がほしい、猿になりたい、ゲームのキャラを現実に出す、カハイバル生活、タイムマシンで戦国時代に行く、タイムマシンを発明する、料理上手になる、空を飛ぶ、各駅停車で北陸制覇、歴史に名を残す、社長になる、家を広いジャングルや海にする、土星の輪っかに乗る、車を運転する、ホームランを打つ、虹を取る、子供を産む、タイピングをする (その他) | |

児童の実態として、「できるようになったこと」に関する記述が少なく、4 マスの中、2 マスや1 マスしか記入できなかった児童が多い。このことから、自分ができるようになったことをあまり実感せずにいる児童が多くいることが明らかとなった。また、「できるよう

になりたいこと・夢」に関する記述には、特定の人（芸能人等）に会いたいという記述や旅行に関するものが多くみられた。そして、将来自分が就きたい職業について考えている児童は、15名と半数以下であるが、自分の社会的な役割に関する将来像を描いている者もいることが明らかになった。

将来の自分が働いているイメージはできない（もしくはイメージしていない）と考えられる児童が23名と半数以上を占めているため、第4学年の児童にとって、将来就きたい職業、いわゆる「将来の夢」を描くことが、直接、児童の「勤労観」を育むことに結び付いているのかどうかには疑問が残る。

次に「将来の自分」に関する反応例を挙げる。

| | |
|---------------------------|--|
| やりたいこと（将来の自分） | <ul style="list-style-type: none"> ・パティシエ、教師、研究者、アルバイト、警察官、料理研究家、野球選手、鉄道会社社員、サライマン、サッカー日本代表、スーパーの店員、太鼓の指導者、看護師、助産士、アニメーター（職業） ・両親を幸せにする、親に反抗する（家族に関すること） ・金持ちになる、酒を飲む、高級車の運転、犬・猫を飼う、縄跳び、ゲームで課金して最強キャラを作る、毎日外食する、好きな食べ物だけを食べる、テーマパークを貸切にする、ドッキリをする、ダンスが上手になる、好きな歌手のCDをたくさん買う、クレーンゲームで景品をたくさん取る、TV番組出演、タバコを吸う、自転車で遠距離を走る、料理をする、給料が高い会社で働く、バンジージャンプ、T大学に進学、金を貯めてゲームセンターで遊ぶ、船に乗って釣り、宝くじをいっぱい買う、旅行（外国、世界一周）、自動車の運転、猫カフェに行く、好きな歌手のライブ、何かの世界記録、商店街のくじの買い占め、定規の買い占め（その他） ・バスケットボールで優勝、シュートをたくさん決める（サッカー）、通算5000本安打、台湾で太鼓演奏（習い事の派生） |
| 人のためにやりたいこと（将来の自分） | <ul style="list-style-type: none"> ・両親にマッサージする、友達に無料でメイクする、病気の子の病気を治す、発明、募金、ボランティア、金を貯める、働いて両親に金をあげる、泥棒を捕まえる、料理を教える（その他） ・医者、薬剤師、警察官、新聞配達、大工、英語教師、ウェブデザインプランナー、政治家（職業） |
| どんな人になりたい？（将来の自分） | <ul style="list-style-type: none"> ・おいしい菓子を作る、みんなを幸せにできる、人を笑顔にしてあげられる、災害が起きた所へ行き女性に無料でメイクをする、優しい、物知り、運がいい、金持ち、有名、おもしろい、タバコを吸わない、酒を飲まない、みんなの役に立つ、料理上手、友達が多い、チームを支える、笑顔がある、人の悲しみを補い合える、心が広い、明るい |
| 今からできることは？（将来の自分） | <ul style="list-style-type: none"> ・大学に行くために勉強、いっぱい勉強、メイクの勉強、読書、貯金、募金、寄付、ボランティア、料理の練習、体力づくり、声出し、筋力トレーニング、体幹トレーニング、サッカーの練習、野球の練習、宝くじを買う、バスケットボールの練習、英語の勉強、絵を描く |

将来についての記述は、全体的に少ない。その証拠に、各項目における1つも書けなかった児童の人数が、「やりたいこと」10人、「人のためにできること」16人、「どんな人になりたい？」17人、「今からできることは？」12人であった。このことから、将来のことを考える機会が少ないと推察される児童が1/3から半数近くいることが明らかになった。

「人のためにやりたいこと」に職業名が出てきたことは、児童が挙げた職業が、人のためになっているという「職業観」が芽生え始めていると言えるのではないだろうか。また、「今からできることは？」に多く見られたのが、「勉強」であった。しかし、今現在の勉強をしていることと、将来の自分とがなかなか結びつかない児童が多くいることにも注目したい。なぜなら、将来のために、「何となく」勉強することは必要なのではないかと思っている反面、「将来の夢」までのルートを知らないため、勉強以外に何をすればよいのかという広がりは見られないからである。「将来の夢」に自分が辿り着くためには、どのようなルートが存在するのか、資格は必要なのか、試験はあるのかなど、詳しいことが分からないがための「何となく勉強は必要」につながっているのではないかと考えられる。

(エ) 実践4-2 <『自分をみつめよう』1/2成人式で10才の節目を祝おう

(総合的な学習の時間) 全12時間>

実践4-1で自分のことを考えた際、将来の自分を考えることが難しい児童が多くみられた。そこで、1/2成人式に向けて、自分のことを見つめるために、保護者からみた自分から、自分を捉えることができるのではないかと考えた。そこで、保護者にアンケート調査を依頼し、「子供のよいところ」、「子供の成長を感じる時はどんなときか」、「どんな大人になってほしいか」の3つの質問に答えてもらった。1/2成人式では、実行委員が中心となって、児童がやりたいことに選んだ中に、「将来の夢」「どんな大人になりたいか」「二十才になった自分へ」をそれぞれが選択し、書いて発表する活動があった。児童が自分について考えた後、保護者からみた自分を捉えて将来の自分について書くことで、自分の捉えに広がりや深まりが見られると考え、本実践を計画した。

また、本実践では、3名の児童を抽出し、以下その変容を挙げ考察する。抽出の観点は、「今の自分」を捉え、将来「どのような人になりたいか」を考えることができていないかどうか、「将来の自分」が就きたい職業を考えているかどうかの2点である。本来4名の児童を抽出する必要があるが、本学級の児童には、「どのような人になりたいか」を考えることができており、将来の職業を考えることができていない児童はいなかったため、3名の抽出とした。

① D1児(男児)の変容

D1児は、「どのような人になりたいか」考えることができていなく、将来の職業も考えることができていない児童である。先述の特別活動で行った活動における「できるようになりたいこと・夢(今の自分)」では、「恐竜を研究して、何か発見すること」「野球の試合でヒットをたくさん打つこと」の2マスを書いた。「やりたいこと(将来の自分)」では、「アルバイト」「T大学に行くこと」の2マスを書いており、「どんな人になりたい？」には何も書くことができていない。「今からできることは?(将来の自分)」には、

「勉強すること」と1マス書いている。

このような実態のD1児の保護者のアンケートには、以下のように書かれていた。(保護者は子供が書いた自分の振り返りを知らない)

| | |
|--|--|
| 子供のよいところ | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・何事にも興味をもって、前向きに取り組むところ ・自分がやりたいと言って始めたことには責任をもって、最後まで取り組むところ ・誰にでも優しく接することができる | |
| 子供の成長を感じる時はどんなときか | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・学校で勉強してきたことを、家に帰って来て、さらに自分で調べるようになったこと ・母親が言わなくても、自分からお手伝いをしてくれるようになったこと ・家であまり泣き言を言わなくなったこと ・わがままな自分を我慢して、辛抱強くなったこと | |
| どんな大人になってほしいか | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・健康を一番大切にしてほしい ・少しでよいから、世の中や人の役に立つことをできる大人になってほしい | |

このようなアンケートを受け、D1児は「二十才になった自分へ」を選び、作文を書いて発表した。

| |
|--|
| <p>この手紙を読んでいる僕は、どんな大人になっていますか。10年前の僕は、D小学校の4年生で、今ちょうど1/2成人式をしています。</p> <p>僕は、小さいとき、よくお兄ちゃんとけんかして、泣いていたそうです。だけど、最近では、けんかすることもあまりなくて、泣くことも減りました。今も、お兄ちゃんと仲よくしていますか。</p> <p>そして、僕は、T大学に行けていますか。T大学では、勉強は楽しいですか。これからも<u>将来の夢に向かって、お身体に気を付けてがんばってください。</u>(下線は筆者)</p> |
|--|

D1児にとって、見えていなかった自分のよさや、どんな大人になってほしいかといった、母親からのアンケートが、今の自分や将来の自分を見つめるために有効であったと考えられる。D1児の書いた手紙の下線にその様子がうかがえる。10才を迎える4年生の児童にとって、保護者からみた「自分」という視点が必要であった一例といえよう。

② D2児(女児)の変容

D2児は、「どのような人になりたいかを考えることはできていないが、将来の職業を考えることはできている」児童である。特別活動における「できるようになりたいこと・夢(今の自分)」の問いでは、「看護師、助産士の資格を取って色んな仕事をしたい」、「アイドルに会いたい」、「新体操で色々な技ができるようになりたい」の3マスを書いた。「やりたいこと(将来の自分)」では、「資格を取って、看護師や助産士になりたい」「アイドルのライブに行きたい」「色んな料理をつくれるようになりたい」「犬や猫がほしい」

の4マスを書いた。「どんな人になりたい? (将来の自分)」では、「どんな人にも優しくできる人」の1マスのみを書いた。「今からできることは? (将来の自分)」では、「たくさん勉強する」を挙げた。

D2 児の保護者からのアンケートには、以下のように書かれていた。

| | |
|---|--|
| 子供のよいところ | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・妹の面倒見がよく、いつも助かっている ・感受性豊かで、少し弱々しく思えるときもあるが、優しい心の持ち主 | |
| 子供の成長を感じる時はどんなときか | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・小さいときは、妹とよくけんかしていたが、最近は何かになりそうなことがあっても相手にせず、大人になったなあと思う ・母の帰りが遅いとき、夜ご飯を作って妹と一緒にご飯を食べ、お風呂に入っていてくれ、とても助かっているが、寂しい思いをさせていないか、親として申し訳ないと思うときがある | |
| どんな大人になってほしいか | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・周りの人を大切にできる大人になってほしい ・小さい子供が好きなので、そういう仕事に就いて楽しく仕事をしてほしい | |

このようなアンケートを受け、D2 児は「将来の夢」を選び、作文を書いて発表した。

| |
|---|
| <p>私の将来の夢は、看護師と助産士の資格を取って、看護師と助産士になることです。</p> <p>私は、<u>赤ちゃんや小さい子供が好き</u>¹なので、小児科の看護師になって病気で辛い子供にも笑顔で接して、辛い気持ちを和らげようと思います。</p> <p>助産士は、<u>赤ちゃんが生まれてくるお手伝い</u>ができるとお母さんに聞いた²ので、私は<u>赤ちゃんが好き</u>³だから、赤ちゃんがちゃんと生まれてくるお手伝いをしたいです。</p> <p>看護師と助産士の資格を取るために、これからも勉強をがんばっていきたいです。(下線数字は筆者)</p> |
|---|

D2 児にとって、保護者からのアンケートが有効であったかどうか、明言することは難しい。しかし、D2 児は、日常的に母親と将来のことや、職業のことを話していることが下線 2 から分かる。また、D2 児は自分のよさを生かして職業を考えていることも下線 1・3 から分かる。このことから、日常的に家庭で将来のことについての話を保護者と話している児童は、自分の将来のことを聞かれても書くことができることが明らかとなってきた。

③ D3 児 (女兒) の変容

D3 児は、「どのようになりたかについても、将来の職業についても考えることができている」児童である。D3 児は、特別活動における「できるようになりたいこと・夢 (今の自分)」の問いでは、「タイムマシンの発明」「一輪車に乗れるようになりたい」「ペットを飼いたい」「YouTuber になりたい」と 4 マスを書いた。「やりたいこと (将来の自

分)」では、「先生」「研究」「お酒を飲んでみたい」「高級車を運転したい」と4マスを書いた。「どんな人になりたい？(将来の自分)」では、「優しい」「お金持ち」「運のいい人」「物知り」の4マスを書いた。「今からできることは？(将来の自分)」では、「勉強(特に理科と算数)」「本を読む」「(今からではないが)アルバイトや仕事」「募金、寄付、ボランティア」と4マスを書いた。

D3 児の保護者からのアンケートには、以下のように書かれていた。

| | |
|---|--|
| 子供のよいところ | |
| ・勉強が好きで、集中すると、ご飯に呼んでもなかなか来ない。すごい集中力だと思う | |
| 子供の成長を感じる時はどんなときか | |
| ・言葉の語彙力がついてきて、話の内容が大人顔負けのときがある | |
| どんな大人になってほしいか | |
| ・自分の行きたい道を突き進んで行ってほしい | |

このようなアンケートを受け、D3 児は「将来の夢」を選び、作文を書いて発表した。

私は将来、タイムマシンの発明をするために、大学へ行って科学の研究をして、大学の先生になりたいです。そして、いつかタイムマシンができれば、自分が人生で楽しかったときに行って、もう一度楽しかったことを経験したいです。

タイムマシンは、まだ誰も発明することができていないので、難しいかもしれませんが、まだ誰もやったことがないことなので、やってみたいです。(下線は筆者)

「どんな人になりたいか」「将来就きたい職業」が明確な D3 児にとって、保護者からのアンケートは後押しになったと考えられる。下線からも分かるように、保護者の意見と、D3 児の意見に共通性が見られる。D3 児にあまり変容は見られないが、大学進学やその後の人生までも考えることができている子供にとって、今回の実践は、あくまで確認であり、自分のことが深まることがあっても、広がることはなかったと考える。

(オ) 実践のまとめ

第4学年の児童たちは、これまでに自分のことを考える機会が少ないことが明らかになった。特に、将来の自分について考える機会がこれまでなかった児童が約4割いた。そして、そのような児童にとって、保護者から見た自分を知ることが、今の自分や将来の自分を考えることの一助となったことは、D1 児の変容をみれば明らかだろう。また、D2 児のように、日常的に保護者と将来のことについて話をしている児童は、将来の職業について考えており、D3 児のように将来の自分の明確なビジョンをもっている児童は、保護者からの後押しを受けながら今後も自分のキャリアを築いていくと考えられる。

また、本実践を通しての課題も明らかとなった。それは、児童に「芽線」を伝えることの有効性についてである。本実践では、将来の自分について考えられる児童が少なかった実態から、教師からの「芽線」を伝えることはなかった。もちろん、教師からの「芽線」の

提示は、児童の将来を描くための一助となればよいものであり、児童が描く「将来の自分」と関連しなくてもよいものである。しかし、本研究にとって、「芽線」がキー概念となってくることから考えても、「芽線」を伝えなかったことは、その有効性の検証にはなっていない。ただし本実践では、保護者からの「将来こうあってほしい」という思いを伝える機会があったため、保護者からの「芽線」のようなものの有効性は、検証できたと考えている。

本実践を通して、第4学年という発達段階において、保護者からの他者評価の重要性については、その効果が明らかになったが、今後、児童同士の関わり合いや、教師と児童の関わり合いを通して、児童の自己評価と他者評価にどのような関連性が見られるのかを実証していくことも課題として挙げられる。

6 まとめ

4名の教諭の実践を通して共通して見られる成果や課題について述べる。

(1) 成果

単元の冒頭から「自分の将来就きたい職業を考えましょう」と投げかけても、多くの児童は将来像を簡単には描けないことが分かった。そこで、自分の長所や短所、好きなことを考えることを契機に、それらを発揮できる職業を調べ、その職業に就くために必要なスキルやそれを身に付けるためにこれからの生活で何を実践していくかを考えるといったスモールステップで学習を進める必要があることが分かった。

しかし、自分の長所や特質を自分自身で見つけ出すことは、発達段階上、思春期特有の気恥ずかしさや自己対話する力が稚拙であることにより、6年生という段階でも難しいことが分かった。そこで、学級の仲間、保護者、先輩等からの「評価」や「アドバイス」、教師の「芽線」を注入することが効果的であることが分かった。付箋を使った学級の仲間からの承認や、教師による児童に適していると考えられる職業の紹介により、児童は自己有用感や自己肯定感を高めることができたと考える。特に、教師からの「芽線」は児童の職業の幅を広げることにとっても有効だった。

さらに、友達を認める活動を取り入れたことで学び合いが進み、学級における仲間意識も高まるなど、生徒指導としても有効であったと言える。

そういった効果を発揮するためにも、教師自身が普段から児童の行動や性格をよく観察し、各児童のよさを捉え、学級全体に対して各児童のよさを発信していくことも重要と考える。

また、保護者や先輩からのアドバイス等を聞くことにより、「なりたい自分」に向けて背中を押してもらったり、より将来について身近に考えることができるようになったりすることも見えてきた。

さらに、保護者や先輩たちから学んだ将来に向けて必要だと感じたスキルや生活習慣を、児童は実践しようとする普段の生活態度を見直し始めるという相乗効果も見られた。そのため、学習態度も少しずつ変化し、目標をもって意欲的に学習に取り組もうとする雰囲気教室に広まっていった。

また、スモールステップでの学習には、「自己分析シート」や「マンダラート」といったワークシートが必要である。何度か同じワークシートに加筆していくことで、変容を捉えやす

くなったり、自分がすべき行動を書いて掲示することで、普段の生活の中で意識的に行動しようと思いがけたりすることができる。さらに、ワークシートの構成を工夫することも重要であることが分かった。自己のよさ等と職業を枠や矢印によって結び付けたワークシートを使用することにより、一見、独立して見える職業の共通点を見出し、それらを結び付けてさらにふさわしい職業を考えるなど、理想論だけで語られがちとなる将来像を、自分の長所や特質と結び付けてより身近に考えることができることが明らかとなった。

(2) 課題

自己分析における課題は、ワークシートの工夫に発達段階に応じた多様性をもたせる必要性があることである。4人の実践で用いたそれぞれの分析シートは自作のもので、学年も異なるため、どの段階の児童がどのような課題に対応できるのかを探る状態で作成したものであった。そこから見えたことは、それぞれの段階で将来に対する考え方に大きな差があったことである。その差を理解した上で、1年生から6年生まで、系統的にキャリア教育を推進することができるワークシートの開発が必要であると考えられる。

他者評価における課題は、保護者との関係である。児童に望む将来像やふさわしいと考える職業について保護者の協力が得られない児童は、自己有用感を感じるができない。また、保護者の様子を見て、仕事に関するプラスのイメージをもっている児童ばかりではないのが実際のところであると考えられる。そのような児童に対しても、仕事に就くことの意欲付ける手立てを考える必要がある。保護者や児童に誤解を招くことがないように配慮することが重要であると考えられる。

学習全体を通しての課題は、学習の進め方である。児童の思考を自然に流すための単元構想や、各学年におけるキャリア教育の終末をどう設定すべきなのかについては、本研究においては明確にはなっていない。各学年のゴールをどのように設定し、6年生の卒業時にはどのような姿を目指すべきなのかを示す必要があると考えられる。

また、過去に将来の夢を考える機会があると9マスのマンダラート作成ができることより、継続したキャリア教育は児童にとって必要であり、6年間を見通した系統的なキャリア教育について、今後も研究していきたい。

以上のように、実践を通して多くの成果や課題が見つかったが、一番の収穫は、4つの学級の児童の自己肯定感や自己有用感が高まったことである。そして何気なく過ごしてきた学校生活に意義を見出す児童が増えたことである。これからも実践を重ね、児童が明るい将来を描き、それに向かって努力する姿を増やすことができるようにしていきたい。

7 おわりに

様々な研究機関が、AI（人工知能）やロボットによる自動化が進んだ未来の予想を発表している。しかし、それはあくまでも予想であり、実際のところ、どの職業が存在しなくなり、どのような職業が生まれるのかは不確かである。なぜなら、今現在、児童生徒である子供たちが、我々が想像もしない機器を開発するかもしれないし、皆でスマートフォンやコンピューターを捨て自然に寄り添ったアナログの暮らしをよしとするかもしれないからである。つまり、未来

には無数の可能性があり、何が正しいということもないわけである。

そんな見えない未来に向かっていくのは、いつの時代も同じなのではないだろうか。そんな時代の流れの中で、学校教育には児童生徒の可能性を広げる、才能を開花させていく、もしくはその種まきをするという責務があると考ええる。

第三者（保護者、教師、他の児童生徒、先輩、大人等）から、「君には、こんなにもすてきなところがあるよ」「君の力があつたから成功したよ」「君はここが弱点だから、気を付けたほうがいいよ」といった言葉を栄養として注がれ、自己を見つめ、認め、改善していける、そんな未来志向の人間を育てていきたいと考える。

今後も、キャリア教育を主軸とした実践を繰り返し、研究として積み重ねていき、未来の人間の活躍に少しでも貢献したいと考える。

参考文献

- 1) Carl Benedikt Frey & Michael Osborne (2013) The Future of Employment :How susceptible are jobs to computerization ? Published by the Oxford Martin Programme On Technology and Employment
- 2) 今泉浩晃 「創造性を高めるメモ学入門」 日本実業出版社 (1987)
- 3) 国立教育政策研究所 「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について (調査研究報告書)」 (2002)
- 4) 国立教育研究所生徒指導研究センター 「自分に気付き、未来を築くキャリア教育 小学校におけるキャリア教育推進のために」 (2012)
- 5) 児美川孝一郎 「日本における『キャリア教育』実践の展開 (1) -小学校におけるキャリア教育をどうすすめるか-」, 『生涯学習とキャリアデザイン3』 pp..49-66,法政大学キャリアデザイン学会 (2006)
- 6) 文部科学省 「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告 ～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～」 (2004)
- 7) 文部科学省 中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」 (2011)
- 8) 文部科学省 「小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 総則」 (2017)
- 9) 文部科学省 「小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 総則編」 (2017)
- 10) 佐藤広志 「キャリア教育のヒドゥン・カリキュラム」, 『教育総合研修叢書6号』 pp..71-85 (2013)
- 11) 辻井満雄・氷見卓也 「小学校段階におけるキャリア教育についての一考察」
富山国際大学子ども育成学部紀要 第10巻 第1号 (2018)
- 12) 吉武聡一・西山久子 「小学校におけるキャリア教育の推進に関する動向と実践上の課題」, 『福岡教育大学紀要 第60号』 pp..191-202 (2011)
- 13) Weblio 辞書 ジョハリの窓 百科事典 (2018)
https://www.weblio.jp/wkpja/content/ジョハリの窓_ジョハリの窓の概要 最終アクセス 2019年1月27日